

令和元年第16回教育委員会定例会  
(8月21日開会)

台東区教育委員会

日 時 令和元年8月21日(水)午前10時00分から午後4時57分

場 所 台東区役所本庁舎10階1002会議室

出席者

教 育 長	矢下 薫
教育長職務代理者	高森 大乘
委 員	垣内恵美子
委 員	末廣 照純
委 員	樋口 清秀

出席者

事務局次長	酒井 まり
庶務課長	小澤 隆
学務課長	福田 兼一
児童保育課長	佐々木洋人
放課後対策担当課長	西山あゆみ
指導課長	小柴 憲一
教育改革担当課長 兼教育支援館長	倉島 敬和
生涯学習課長	久木田太郎
スポーツ振興課長	櫻井 洋二
中央図書館長	宇野 妥

日 程

日程第1 議案審議

第35号議案 令和2～5年度使用 台東区立小学校教科用図書採択について

第36号議案 令和2年度使用 台東区立中学校教科用図書採択について

第37号議案 令和2年度使用 台東区立特別支援学級教科用図書採択について

日程第2 教育長報告

1 報告事項

(1) 庶務課

ア 「区長への手紙」等にかかる教育委員会の対応について

4 その他

・ 区民文教委員会における教育委員会に関する審議等概要について

午前10時00分 開会

矢下教育長 ただいまから、令和元年第16回台東区教育委員会定例会を開会いたします。本日の会議録署名委員は、樋口委員をお願いいたします。

ここで傍聴について申し上げます。

本日、会議の傍聴を希望する方については許可することとしておりますので、ご了承ください。

また、今定例会においては、東京都台東区教育傍聴規則第4条ただし書きの規定に基づき、許可いたしたいと思っております。

また、本日の会議について、写真撮影を行いたい旨の申請がありました。つきましては、東京都台東区教育委員会傍聴規則第7条の規定により、許可いたしたいと思っております。

#### 日程第1 議案審議

##### 第35号議案・第36号議案・第37号議案

矢下教育長 それでは、日程第1、議案審議に入ります。

第35号議案、第36号議案、及び第37号議案を一括して議題といたします。いずれも8月2日に開催した定例会からの継続審議の案件となります。

本日は8月2日の定例会において、協議した審議方法に基づいて、教科用図書の採択を行ってまいります。

確認の意味で、私から審議方法について再度説明をいたします。はじめに小学校教科用図書について審議し、次に中学校教科用図書、最後に特別支援学級教科用図書について審議をいたします。審議する教科の順番につきましては、学習指導要領の教科の順番で、1教科ごとに審議・仮決定をしていきたいと思っております。

小学校教科用図書については、推薦する教科用図書の発行者について、各委員から理由を付して挙げていただきます。挙げていただく発行者については、1者しかない場合は1者、複数ある場合は3者までとし、優先順位をつけて挙げていただきます。

その際にご留意いただきたいのですが、今回の採択に当たりまして、私たちは当初から一貫して公平性の観点から、全ての教科用図書の発行者名をアルファベットに置きかえた状態で内容を確認し検討をいたしました。したがって、意見交換の際も、推薦する発行者を挙げていただく際も、A者、B者という、アルファベットでご発言くださいますようお願いいたします。

次に、推薦を挙げていただく際の発言の順番ですが、教科ごとに議席順でご発言いただき、はじめの教科が議席順1番の委員から始めた場合は、次の教科は議席順2番の委員から始めるというように、教科ごとに最初の発言者をかえていく方法を進めたいと思っております。

なお、中学校教科用図書は平成30年度検定において新たな図書の申請がなかったため、前回の平成26年度検定合格図書の中から採択を行うこととなります。つきましては、各委員にお渡ししてあります、平成27年度採択における資料調査研究の報告書及び使用実績等を踏まえて、各委員からご意見をいただき、審議及び仮決定していきたいと思っております。

また、特別支援学級教科用図書については、年度ごとの子供たちの障害の状況等を考慮して審議及び仮決定をしていきたいと思ひます。

それでは、審議する教科の順番、発行者の推薦方法及び発言の順番については、そのように進めさせていただきたいと思ひます。

次に、仮決定についてでございますが、委員全員からご意見をいただいた後、委員会として採択する1者を仮決定してまいります。小学校教科用図書についてですが、3人以上の方が第1位に推薦した発行者については、過半数を超えておりますので、それをもって仮決定といたします。ただし、過半数に満たない場合は、各委員から改めてご意見をいただくなど、協議をした上で仮決定してまいります。

なお、仮決定するまでは、発行者名はアルファベットに置きかえた状態で審議をいたしますが、仮決定した発行者名については公表いたします。

なお、今年度から全ての教科について仮決定した後に、審議を行った全てのアルファベットの発行者名を公表いたします。

次に最終的な採択までの流れについて説明をいたします。小学校教科用図書の仮決定が全て終了した後に、中学校教科用図書及び特別支援学級教科用図書についても審議をして仮決定をいたします。その後、委員会を休憩とし、休憩中に事務局が仮決定をした内容で、第35号議案、第36号議案及び第37号議案を用意いたします。準備ができ次第、委員会を再開し、作成した議案により採択の議決を行いたいと考えております。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、本日はそのような審議方法で進めてまいります。それでは、早速審議に入りたいと思ひます。まず、第35号議案についてご審議願ひます。

## 国語

矢下教育長 まず国語についてご審議願ひます。発行者は4者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願ひます。

まず、議席番号1番の樋口委員から順にお願いをいたします。

樋口委員 国語ですけれども、今回の教科書採択につきまして全般的に申し上げますが、私は大学で経済学を教えておりまして、その中において、学生の指導もかれこれ20年以上やっているのですけれども、やっぱり勉強の好き嫌いというのは、小学校時代から始まっているんじゃないかと思ひます。

その点において、二つありまして、一つは教科がおもしろい。もう一つは先生がよく教えてくれたと。この二つが大きなポイントになっているように思われます。これは私の感想です。

つきまして、今回の教科書の選定につきまして、まず全てに目を通させていただきました。その上で、教科書用図書調査委員会研究委員会からの報告がございまして、今手元

にあります。これにおいて現場の先生方がそれぞれの教科書において意見を述べられております。内容、構成、分量、表記、使用の便利などにつきまして、各教科書について意見を述べられております。私は、この二つを重視して、今冒頭に述べました子供たちが勉強が好きになる、及びこういう勉強をしたらこれが理解しやすいだろうと。なおかつ、肉体的に負担にならないという意味では、なるべく教科書の重さが軽いほうがよろしいかなと思っております。

国語ですが、その上で、読む、書く、話す、この3点についてわかりやすい教科書を選定させていただきました。

冒頭に言いますが、1位がD者、2位がA者であります。理由を言います。D者ですけれども、各教材の単元ごとに目標が一文で書かれておりまして、最後に振り返ろうという最後の単元の巻末にあるところで、いわゆる各単元の冒頭と整合がとられておりまして、子供たちは各単元ごとにこういうことを勉強しているということがわかるだろうと思いました。さらに、2年生以降の教科書には、つかむ、取り組む、振り返るをという、3段階のステップで各章の内容がわかるようになっております。また、Dが最も軽量というところの評価もあります。

さらに、領域ごとの単元数ですけれども、読むこと、話すこと、及び書くこと、これらは教科書選定委員会の分類ですけれども、D者の教科書は32、34、71。2位のA者は32、40、71、そんなにかわらないんですけれども、さらに細かく見ていく説明的文章、文学的文章、詩、俳句、短歌、この点の、この5分類の内容につきましてD者とA者を比較しますと、説明的文章、文学的文章については、ほぼ同じで34、34及びA者、D者、説明的文章は34で同じであり、なおかつ文学的文章も34、32。ところが、詩のところに行きますとD者が65に対してA者は36。俳句、短歌においてはD者が61に対してA者が54。その一方で古典についてはD者が9に対しまして、A者が12というところでありまして、現代のこの世界において、とかくいわゆる直感的に物事を考えるような風潮がある中において、やっぱり詩及び俳句、短歌を熟読、なおかつ吟味するということは、いわゆる考える能力ないしは想像力育成にとってはとても重要であろうと考えまして、このD者が1位、2位にA社とさせていただきます。

さらに、D者につきましては、巻末に点字と手話のところに行及されてありまして、点字、指文字の50音表記が掲載されているというところでは、ほかにないところでありまして、これもやっぱり世界をちゃんと理解することにおいて勉強されるということはとても国語教育上において重要であろうと考えまして、以上の評価になりました。

以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員お願いをいたします。

末廣委員 私は、2者を選びました。2位から申し上げますと、2位がD者です。それから1位がC者です。

2位のD者から簡単に申し上げますと、これは、C者などほかの教科書でも同じなんです

が、やはり国語では、まず話す力、聞く力ですね。それから書く力、そして読む力。これをしっかりと育てるとのことだと思います。

例えば6年の教科書で見ますと、まず話すとか聞くというのも、これは教室でのグループの学習ということで考えているようですが、まずお話を自分たちでつくっていく。それからそれをもとに対話をしていく。それで自分の考え、友達の考え、それをお互いに交流して、他人の考え方を聞いて、また自分の考えに生かすと。そういう筋立てですね。いわゆる目的とか条件に応じて計画を立てて、自分の考えをまず明確にする。これがなかなか子供たち、難しいことだと思うんですが、そういう力を育てていこうということですね。それでその上でまたグループで話し合う、あるいは自分の課題をスピーチするということがあります。そのためには資料をちゃんと準備して感じたことを伝える。そういう筋立ての、話す力を育てる具体的な展開が語られています。

それから書くということでは、まず例えばこれも主体的に学習をするということで、自分で短歌をつくっていく。これはなかなか難しいと思いますが、一応6年生ですから、できないことはないだろうということですね。あるいは自分が提案する文章を書く、あるいはみんなに知らせるために、パンフレットをつくるとか、あるいは自分の座右の銘を言葉に表していくと。そういうような具体的な書くという学習を、こういう手順で行っていくということが書かれています。

それから、読むということでは、やはり書いている人、筆者の主張、そしてそれがどういう事例で、それをもとに主張されているかというようなことをちゃんと見ていく。それから自分の生き方と社会との関係ですね。あるいはメディアと社会とか、そういうところまで説かれています。

プログラミングの話も出てきて、それは資料として出てきておりますが、一つのものだけを読むのではなくて、一つのテーマに関しまして複数の文章を読むということが必要だというふうに説かれております。

また具体的に6年の教材で見ますと、宮沢賢治の「やまなし」、これは賢治の作品ですけども、それに伴って「イーハトーヴの夢」。宮沢賢治に関する評論というのが同時に載っていて、そしてなおかつ賢治と同時代の作家たちの本、作品が4冊ほど載っているということで、こういう一つのテーマで丁寧にいろいろと資料を出しているというのは非常にいい点だと思います。

また、言葉の使い方とか、漢字の形のこととか、言葉に関するコーナーがずっと各学年ともあります。

それから本を読もう、本の世界を広げようということで、本の紹介があります。5年生では大体38冊、まとめて巻末にあるわけですけども、途中の部分で本の紹介もありますので、約50冊ほど。それから6年生も50冊ほどの本が紹介されております。

そのほかに、このD者のいいところは、季節の言葉というコーナーがありまして、これは2年生以上、全部載っております。例えば春の野菜とか山菜、夏の食べ物とか、夏の行

事の花火とか、うちわとか、あるいは4年になりますと、四季の行事、ひな祭りとか七夕、月見、七五三とか、あるいは5年生になりますと、古典、俳句、枕草子の四季ですね。春はあけぼのとか、そういうのが出てくる。6年生になると24節気が載ってくる。

それから漢字の広場というのがあって、これも2年生以上です。このページにある漢字を使って文章をつくるというのが提案されております。

それから、言葉の使い方というコーナー、情報というコーナー、受け継がれる言葉というコーナーですね。特に受け継がれる言葉では、古典に出てくる言葉とか、季節の言葉というのが出ております。

最後に付録に学習を広げようということで、特にそれぞれの単元で大切というものがまとめてあります。

以上いろいろといいところがありますが、2位ということにいたします。

1位はC者ということで、これも5年生、6年生を中心に見ましたが、それぞれの単元で、特に文化が出てくるコーナーですね。例えば5年生の上で、実際に孟浩然とか李白とか、あるいは論語の本文が出てきます。それからあるいは鳥ですね、鳥が関係する言葉。関係する俳句とか詩、そういうものが出てきております。5年生の下になると、金子みすゞの話ですね。みすゞ探しの旅ということで、この矢崎節夫さんが金子みすゞの詩を発掘した話が出ております。その出会いとか、あるいは全集の写真とか、みすゞ探しの旅ということで、非常に面白い教材だと思います。

それから、5年生の下では、いわゆる世界遺産で白神山地が取り上げられていて、その提言ですね。植物学者の齋藤宗勝という方が、白神山地の生き物、自然保護、課題、またぎの話、研究所の研究員の話とか。それがずっと出てきて、最後にグループで考えようと、こういう視点。それで自分の考えをまとめていくという、白神山地の一つのテーマで、これだけ多方面から追求しているというのは非常におもしろかったところです。

それから6年生になりますと、6年生の上では、声に出して読むということで、伝統文化で、やはり枕草子の春夏秋冬、春はあけぼの以下ですね。これが全部出てきております。それから例えば雨に関する言葉、雨に関する植物、動物、ことわざ、季節、あるいは短歌、俳句、詩があって、雨という一つのカテゴリーに全部出てきております。それから知恵の言葉を集めようとか、ある意味ではユニークな一つの編集だと思います。

それから、言葉ではいわゆる和語。それから漢語、外来語、いろいろある。その例が出てきております。それから漫画のおもしろさの秘密とか、そういうところまで述べられております。

また6年生、付録ではオードリー・ヘップバーンの話ですね。これは女優としてではなくて、晩年ですね。いろいろと世界の子供を救おうという、活動をしていましたけれども、その話が載っていたり、あるいは正岡子規の話が出てきています。それから文化のコーナーとしては、万葉集、あるいは正岡子規、夏目漱石、芥川龍之介ですね。これらの作家の話、あるいは言葉は時代とともにということで、古典がまた出されております。

そういうことで、先ほど申し上げましたD者の2位と、C者の1位というのは、ほとんど差がないのですが、全体的に見てC者が1位であると判断しました。

以上です。

矢下教育長 続いて、垣内委員、お願いをいたします。

垣内委員 まず全体を通しまして、今回の教科書採択に当たっては、学習指導要領が改訂されたということで、幾つか論点がありますので、それを念頭に置きながら各教科の採択に向かったという状況になっております。

まず実際の社会生活で生きて働く知識、これだけではなくて、未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力、そしてさらに学んだことを生かそうとする学びに向かう力、人間性など、こういったものに十分配慮されている教科書を選びたいというふうに考えました。

具体的には、子供たちが使いやすく、内容も発達段階に沿っているということもそうですけれども、余り大きくてかさばって重くないという物理的なことにもちょっと配慮しました。さらに、教員の方が使いやすいかどうか、特に構造が明らかになっているかどうか、学習で何を目標として、どういうことを学んで、そしてそれをどういうふうに置きかえるのかといったようなことも配慮いたしました。

国語に関しては、国語を適切に表現、正確に理解する言語能力、伝え合う力、思考力、想像力などの言語感覚を養うということを目標とされております。語彙、言葉の使い方というものが非常に重要ですが、それをどういう場面で、どのように展開していくのかというようなことも配慮されているというのが重要かと思いました。

この教科書全体ですけれども、既にほかの先生方もおっしゃいましたけれども、いずれもよく工夫されておりまして、なかなか選ぶのが難しかったですけれども、私は第1位はD者、第2はB者といたしたいと思えます。まずイントロダクションのところ、学習で身につけるべき項目、それから資質、能力などがきちっと提示されていて、また単元冒頭では週の目標や振り返りについても丁寧に示されているという点が評価できました。それからキャラクターやイラストを用いたり言語活動についても幾つかポイントを示されていて、これは特に教えていく教員の先生方の経験値にかかわらず、一定の教育効果が上がるのではないかとこのように思いました。

また内容については、説明的な文章から文学的な文章、詩や俳句、短歌、古典など、いずれの教科書もバランスよく配置はされておりまして、また共生的にも非常に重なる部分が多いわけですが、その配置の仕方とか、どういう活動で使っていくのかという場面のところで、どこにその教材を用いるのか、どういう流れの中で用いるのかということの工夫が、よりされているという点でD者を推したいというふうに思っております。

また関連書籍の紹介、それからインターネットから古典まで、年間を通じて多様な教材もあるということですが、その中で点字、指文字についてもきちんと掲載されているところで、第5学年ですかね、D者の工夫を評価したということになります。また、イラ



ストに関してもこの教科書と各社でも、ほかの教科書でも取り上げられているんですけども、D者の場合は特にさまざまな啓蒙活動の場面が多数イラストで示されているところ、広がりを持たせることができるんじゃないか。また注釈だけでは伝わりにくい言葉についてはイラストを掲載しているなど、また議論をしている場面など、イメージがつかみやすいというようなこともありまして、D者がいいかなというふうに思いました。

あわせてアンケート作成なども含まれておりまして、多様な場面で言葉を使っていくというような勉強ができるのではないかというふうに考えて、第1位はD者といたしました。

僅差ではありますが、第2位がB者、B者につきまして、同じように丁寧なイントロダクション、構造が見られまして、バランスがとれた教材というふうに判断いたしました。

以上です。

矢下教育長 続いて高森委員お願いいたします。

高森委員 私は、今回の教科用図書の選定に当たっては、主として都の教育委員会並びに区の教育委員会の調査研究委員会の分析結果報告を参照にしつつ、これに個人的な選定・評価の視点を加味して、各社を比較検討いたしました。

具体的に申し上げますと、1点目の視点というのは、教科の概論に相当する部分について、当該教科を学ぶ意義が明確に示されているかどうか、書写や地図といった教科の場合については、教材の活用法が具体的に示されているかどうかといった視点です。

2点目の視点は、各教科に共通する項目について比較するもので、目次・索引・付録などの利便性、学習の方法論やアプローチ法の提示が明確に示されているか、設問や導入・振り返り、まとめ等の内容は妥当か、発展学習や家庭への持ち帰り学習の効果は期待できるか否か、といったような視点です。

3点目の視点は、各教科固有の学習領域・学習内容に関して、教材・コンテンツが有効に活用されているか否かといった視点です。

こうした観点に基づいて、各社の教科用図書を多角的に比較・検討し、各教科ごとに上位2者に絞り、順位づけをいたしました。

では国語科につきまして、評価の視点並びに選定の結果と理由を述べます。

国語科では、第1に各教科の分量・配分に着眼して、聞く、話す、読む、書くという学習領域ごとの単元数・教材数のバランスが適切かどうか、それぞれの領域が一連の言語活動の中に系統立てて配置されているかどうかなどについて比較しました。

第2に、基礎・基本の定着という観点から、台東区の児童の学力の水準に見合った内容・構成になっているかどうか、基本的ポイントをおさえるコーナーが充実しているかどうか。活動の中にアクティブラーニングを意識した主体的・対話的・深い学びが確立されているかどうかなどに着目いたしました。

第3に付録的要素の充実度について、言語学習の発展的学習、文法・慣用句などを活用した多様な表現法の学習、既習漢字・新出漢字の辞典類、同音・同訓の異義語並びに異字

語の使い分け学習、教材に関連した文献紹介などのコンテンツが充実しているかどうか分析いたしました。

これらの分析を通して、私は、1位にD者、2位にC者を推薦いたします。まず第1の視点である「聞く」「話す」「読む」「書く」各領域の分量・バランスについては、2者とも各学年において概ね偏りなく配置されていることが読み取れます。2者のうちC者では、各学年とも目次に続けて「5年生で学ぶこと」「6年生で学ぶこと」というように、当該学年で学ぶ単元の道のりが図式化されており、1年間の学習の内容とその意義を筋道を立てて見通せる工夫がなされています。

一方、D者は「5年生で学習すること」「6年生で学習すること」のページを設けて、文章表記を主体に、1年間の学習の見通しを系統立てて説明しています。C者のほうが視覚的にわかりやすいのですが、図に頼らない文字ベースのD者のほうが情報量は多く充実していると思われます。

第2の視点である教材や活動の内容について、C者は具体的な発問が多く、ターゲットとしている児童の学力の水準も概ね低めに設定され、児童の習熟度にも柔軟に対応できる内容になっているのではないかと思います。一方のD者は、具体的発問と抽象的発問が混在していて、学習者の気づきを促したり、深く考える部分につながる工夫が取られているようです。

具体的な学習活動について一例を挙げて比較してみたいと思いますが、比較の際には、各者において共通に用いられる教材を対象にするとよいと考えますので、そこで、4年生で学習する「ごんぎつね」の教材で2者の内容を比較いたしますと、C者は4年生下巻24から27ページ、D者は4年生上巻30ページから32ページをご覧いただければおわかりのように、C者は、「確かめよう」「考えよう」「深めよう」「広げよう」の4段階、D者も「とらえよう」「深めよう」「まとめよう」「広げよう」の4段階でそれぞれ学習を深め、広げていく工夫がとられており、児童も段階を追って学習活動に取り組むことができるようになっています。また、2者とも四つの段階、それぞれに一つから二つの課題が提示されており、授業進行に当たっては無理のない構成になっているように見受けられます。

ただし、その中身について具体的に見ていきますと、C者の場合は、24、25ページ下段に四つの段階に呼応する形で学習者の対話形式による考え方のヒントが示されていますが、話し合いや考え方を意図的に誘導する形になっているため、活動は円滑に進むかもしれませんが、柔軟な発想に基づくアクティブな意見交換には向いていない気がします。

一方、D者の場合は、30、31ページ下段に同様に4段階に呼応したヒントが示されていますが、こちらは考えたり、まとめたり、話し合ったりするための事例が示されるだけで、学習活動の自由度はかなり高くなっているようです。授業を円滑に進めると同時に、アクティブな活動を重視していることが読み取れます。

今は一例のみを挙げましたが、この単元に限らず、ほぼ全ての教材においてD者のほうが授業を進めやすい工夫と、主体的・対話的・深い学びを通して気づきを促す学習の確立

が図られていると思われます。

第3の視点である付録類の充実度について、2者ともに新出漢字の辞典類だとか、文法事項の学習及び拡充に資する教材、学習用語の解説、図書館活用や推薦図書の紹介などは必要な内容はほぼ満たされているようですが、D者のすぐれているところは、学年で学んだ重要ポイントを「聞く」「話す」「読む」「書く」の各領域ごとに「たいせつのまとめ」として集約している点、また6年の巻末の付録「学習を広げよう」では、課題のを見つけ方、調べ方のポイントや、考えをチャートで図式化する方法など、将来、高等教育等でも活かされるであろうレポートや論文の執筆に資する研究態度や方法論がまとめられている点などが挙げられます。

また、中学校への接続について、D者は6年の234、235ページに「中学校へつなげよう」のページを設け、小学校6年間の学びを自分の言葉で記入する教材が用意されております。一方のC者は6年の下巻166ページに「中学校で学ぶ特別な読み方の言葉」といった教材があるにとどまります。

以上の分析に基づいて、限られた時間内で無理なく全員が取り組めるような内容面、主体的・対話的・深い学びが有効に成立するという機能面に力点が置かれている点で、私はD者を第1候補、C者を第2候補の順で順位づけたいと思います。

以上です。

矢下教育長 私のほうですけれども、今回、各教科を見ていく上で、その教科、科目の学習の進め方ですとか取り組み方がはっきりとわかりやすく示されているか。またそれぞれの教科書の単元の内容においても、その学習の進め方がしっかり取り入れられているかといった点を特に見てきております。

主体的、対話的で深い学びの実現にとって、児童が自分から一定の学習の仕方、学び方を身につけることが極めて有効であるというふうに考え、学習の仕方、進め方を児童自らが獲得することが主体的、対話的で深い学びを進めていくことにつながっていくというふうに考えるからであります。

さらには、そうした学習方法を自分自身のものとするのが、今のような情報にあふれた社会を生きていく上では極めて大切なこととも考えております。

その上で各教科書を見ていきますと、国語は、全ての基本となる科目ですけれども、「読む」「書く」「聞く」「話す」、満遍なくどの教科書も触れられております。教材の内容としては、説明文であるとか、文学的なものであるとか、詩にも加えて、それらの内容の古典、俳句や短歌といった幅広く取り上げられております。また、国語が読書につながる、読書は全ての基本的な活動なんですけれども、読書についても図書館の活用について明確にそれぞれの教科書で述べられておまして、これらの今申し上げたことに関しては、いずれの教科書も一生懸命工夫してつくられているなと思ったところです。

それでは改めて先ほどの学習の進め方ですとか、進め方、考え方、それらがしっかり述べられているかの点に絞って見させていただくと、1位にD者、2位にC者を推させていただきます。

きます。

D者は目次の後で各学年の国語の学びを見渡そうとして、学習の進め方を示した上で、各単元の内容では、単元の前に問いを出しています。内容の後にはさらに学習の流れを示して、その学習を取り組む流れを示す。

C者も各単元の後で学習の流れを示していて、いずれも学習の仕方、教科の考え方、あるいは流れを示しており、学習への取り組み方が非常にわかりやすくなっているというふう感じております。さらにD者は巻末に学習を広げようということで、各単元での実践をさらにまとめて使いやすくなっている。そういった点で今のような内容で推薦をさせていただきたいと思います。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にD者を挙げられた方が4、それからC者を挙げられた方が1。第2位はA者が1、B者が1、C者が2、D者が1というふうに挙げられております。

結果としては、D者を挙げた方が4名と最も多くて過半数を超えております。このことにより、国語についてはD者に仮決定をさせていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、国語についてはD者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、国語についてはD者に仮決定いたしました。それでは、D者の発行者名について、指導課長お願いをいたします。

指導課長 それでは仮決定のD者についてでございます。

出版社名、光村図書。図書の名前は、国語。

以上でございます。

## 書写

矢下教育長 続いて書写についてご審議願います。発行者は5者となっております。それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。今回は、議席番号2番の末廣委員から順にお願いいたしたいと思います。

それでは、末廣委員お願いいたします。

末廣委員 それでは、書写について、私2者を挙げまして、第2位がD、それから第1位がC、いうことで決めました。

まず、書写に求められるあり方について申し上げます。基本的には教科書でも大体硬筆、あるいは鉛筆ですね。それから毛筆という、この大きく分けると、筆記用具としてこの二つがありますが、いずれにせよ、この書写に関しては書く人の形ですね。姿勢と申しますか、あるいは毛筆とか硬筆の持ち方とか、これは厳しくどの教科書にも書いてあります。これは、実際に子供たちがこれを見て、形が決まるような、それだけしっかりとした姿勢で書いてほしいと思います。時々、小学校とか見学に行きますが、大体の子供たちは姿勢がいいんですけども、書くときに前かがみになって、非常に悪い姿勢で書いている子供たちも見かけます。あるいは、鉛筆の持ち方ですね。私から見ると変な持ち方で書いている。これはやはりしっかりと学校で教えてほしいというふうに思います。

また、現代では小学生でもいろいろと物を書きますね。それでそれが広範囲にわたっていて、例えば学校新聞とかポスター、あるいはリーフレットとか、絵日記、観察記録、そういう用途にあわせていろいろな書き方があるでしょうし、あるいは筆記用具もいろいろとかわると思います。

それから家庭では、今メールとか、いろいろと使われておりますが、基本的には手紙、はがき、あるいは封筒で出す、そういうのもやはりマスターしてほしいですね。この手紙、あるいははがき、封筒の書き方が今の子供たちはできてないというのが最近新聞等で話題になりましたけれども、やはり学校でしっかりとこれを教える、小学校時代から習得していくというのが大事ではないかと思えます。

全体的にはそういうふうに考えますが、まず2位のD者に関しましては、言葉に関するいろんなコーナーがありますが、2年生から6年生まで、言葉の窓とか、国語の広場、生活と書写、こういうコーナーで関係のあることがいろいろと述べられております。

例えば5年生では、まちの中にある文字ですね。看板とかそういうのも含めて、そういうのを見ていこうとか、それから平仮名のもとになった漢字はどんなものがあるのかとか、あるいは筆記用具がいろいろとありますが、その例えば筆、その産地はどういうところとか、そういうような書写に関する必要な知識が示されています。

それで、一番肝心なのは書写のお手本ですね。書く文字がいろいろと出てきておりますけれども、D者の場合は非常に手本の文字が多いんですね。少し多すぎるかなと感じました。なるべくたくさんの例があったほうがいいと編集者は考えたと思うのですが、使う立場でいきますと、簡潔であるほうがいいんじゃないかと思えます。

それに対しまして、1位に挙げましたC者ですね。C者では、それぞれの項目、単元で大切という欄があります。この単元では何が大切かというポイントがわかりやすい。これを読めばこういうことをしなきゃいけないというのがすぐわかるということですね。

それから、6年生では、1年生から6年生までで学習したことをいわゆる書写ブックとしてまとめてあります。これは非常に便利だと思います。それから書写に関してもっと知りたいというコーナーがありまして、4年生では紙とか墨とか硯ができるまで。それから5年生では手書き文字と、その大きさ、あるいは漢字のいろいろな書き方、いろいろとありま

すね。あるいは6年生ですと、文字の歴史とか、速く読みやすく書くにはどうしたらいいかと。そういうような実用的なものまでも入っております。そして各学年の巻末には資料というのが載っております。

このC者は、仮名にしても、あるいは片仮名にしても漢字にしても、そこでマスターする必要最低限の文字が挙げられているということで、これはD者と比較して感じたわけですが、学ぶものとしては非常にわかりやすい。余計な文字があまり入ってこない。この単元ではこれをしっかりと書きなさいという、それが明確に表れておりますので、そういうことも含めまして、書写は1位がC者、2位がD者ということでございます。

矢下教育長 続いて、垣内委員、お願いをいたします。

垣内委員 書写に関しましても、機能だけではなくて、それをどういう形で生かしていくのか、またそのための能力を育成するという視点で全ての教科書を確認いたしました。

全ての教科書において、姿勢とか、筆づかい、字形の整え方などについて写真やイラストを豊富に用いて、きちんと説明がなされていること。また、学習の進め方や各学年の学習の目当てといったようなことが構造的に示されていること。いろいろなある意味で日常生活が、学校の生活の中で使われるこの書き方が、デジタル社会であっても書くことは基本ですけれども、非常に多様化している。そういった各場面での書き方について触れていること。そして、実寸大の見本も掲載されているという意味で、全ての教科書、すばらしく工夫がなされているかと思うんですけれども、その中でも私はC者を第1位、D者を第2位に推したいと思います。

その理由ですけれども、先ほどほかの委員の先生もおっしゃいましたけれども、C者の場合は、非常に丁寧に手の動きがわかるような、この示され方がされているというところがありますし、第1、第2学年の巻頭に書写体操というのがありまして、書写に向かうときのさまざまな準備も用意されているということもあります。学習の進め方につきましては、活動の場面等の写真を用いて解説されているので、非常にわかりやすい。考えよう、確かめよう、生かそう、振り返ろう、といった4段階で統一されているという構造化も非常に明白で、好感が持てるというふうに思いました。

あわせて、この学校生活で役立つ教材というのが非常に多様に掲載されています。横書き原稿用紙、それから短歌、ポスター、しおり、新聞、メモ、原稿の名詞、リーフレット、ノート、連絡長、それから絵日記、さらに電子メール、手紙、はがき、招待状といったような多様なものの書き方というのが示されているということも、ほかの教科書もありますけれども、C者が丁寧でよりわかりやすいかと思いました。

特に、5年生の教科書ですか、よく見るフォントというのも写真で示されていて、これも非常にわかりやすいと思いました。ほかにも文字の歴史が書かれていたりして、書写ブックなどもあって工夫がされているというのがC者。

第2位のD者に関しても、同じような工夫がなされているんですけれども、若干重いかなというところがありまして、また、C者のほうがより丁寧に工夫がなされているというこ

とで第1位とさせていただきます。

以上です。

矢下教育長 高森委員、お願いします。

高森委員 書写では、教材の活用法の提示、発達段階への配慮、基礎学習・発展学習のバランス、点画・筆順・字形・旁偏・書体の学習、自由度・応用編の充実、既習事項のおさらいなどといった点に着目して、比較・検討を行いました。

その結果、私は、1位にE者、2位にD者を推薦いたします。

まず、気づくのは両者の判型の違いです。D者はE者よりもサイズが小さくて、教室の机の上に置いたときの教科書の占有率の違いが学習や活動に大きな影響を与えるのではないかと思います。実際の授業で取り扱っている様子を拝見いたしますと、書写の際には、教科書をしまって活動することのほうが多いようですので、サイズの小ささは必ずしも有利とはいえ、むしろ大きい紙面で見せる教材のE者のほうが使い勝手がよいのではないかと思います。

次に、各学年の導入部分で、E者は全学年の巻頭の見返し、折り込みにて、年間を通した目標、書写学習の進め方、単元の目当てなどが説明され、あわせて書写の姿勢、筆記具の使い方、用具の後始末についても、毎学年のはじめにおさらいできる構成になっています。

一方のD者は、児童の発達段階を考慮したためか、1・2学年では、これら全てはそろってはいません。他の教科にも言えることですがけれども、個人的には導入部分に関しては、発達段階を考慮するよりも、一貫性を重視すべきだと思います。

また、硬筆の使い方に関しては、E者、D者ともに実際に鉛筆を手で持った写真入りの解説がありますが、E者のほうは1年の5ページに鉛筆を左手で持った写真が加えられている点がすぐれています。また、毛筆の使い方について、E者・D者ともに正しい筆づかいとあわせて、好ましくない運筆も提示している点が特徴で、特にE者の場合は、3年生の11ページをご覧くださいとわかりますように、好ましくない運筆のバリエーションがD者よりも多いという特徴があります。

そのほかの学習内容については、一長一短あるものの両社ともほぼ同程度の内容で優劣をつけがたいのですが、2者を比較したとき、E者はゆとりをもって単元が展開するのに対して、D者は少々詰め込み過ぎの印象があります。

また、E者の最大の魅力は、各学年の巻末に「書写のかぎ」という既習事項のまとめが掲載されていることです。書道という自習系の教科では、各単元で学習した内容は、頭の中では整理しづらいという難しさがあるのですが、巻末にこのような既習事項が整理されていることで、しっかりと復習や確認がとれるという点でE者は高く評価できます。

ここまで私がE者を1位に選んだ理由でございますけれども、最後にD者がほかの4者よりも抜きん出た点について1点だけつけ加えたいと思います。これは、かつて私がとある書道家に教わったことなのですが、その方いわく、調和のとれた美しい書を書きたいのであ

れば、墨をつける黒い部分と同じだけ墨をつけない部分、つまり白い部分に気を配ることが肝心なのだと思います。言い換えれば、書道は「白い部分を書いている」とも言えるようで、書道用語で、それは専門用語で「計白当黒」と言うのですが、白きを計らい黒きを当てるといいます。筆と筆の間、字と字の間、行と行との間といった白い部分の間の取り方が作品全体の印象をかえ、そうした余白の「ゆとり」だとか「間」を意識するだけで、字は上達するのだということなのです。

この点に着目したとき、今回2位には挙げましたけれども、D者は例えば6年生の12ページの「湖」の字の組み立てについて説明する中において、水色で塗り潰された円や四角でその字と字の間が表現されています。一方、E者では、6年生の10ページに同じ「湖」の字の組み立てについて学習する場面がありますが、こちらは墨付き・墨なしの調和を意識した学習は確認できません。同じような表現はD者の2年生29ページの「画の間」を初見として、以降6年生まで随所に確認される一方で、E者では2年生の35ページに「画の間」の学習が1カ所あるものの、以降につながっていない。余白を意識させる学習は、D者以外のほかの4者にも見られない大きな特徴になっていると思います。

そうした魅力がD者にはあるのですけれども、少々テクニカルな部分が小学生には少しなじまない高度な内容だと思うことと、日ごろ書道に慣れ親しむ機会の少ない児童に適した基礎的内容の比重の高さを考慮して総合的に判断し、私は1位にE者、2位にD者を推薦いたしたいと思います。

以上です。

矢下教育長 次に私ですけれども、日常生活では字を書くということは少なくなっているのですが、字を書く書道と言われているようなこと、「道」、道がついているので、日本の中でも伝統的であるし、すごく文化で大事なことなんだろうなというふうに考えています。また字を書くという、書というのは、書は人なりですとか、字が心を映す鏡とも言われますように、極めて日本人の文化、伝統にとっては大事なものなので、この書写においては、字の書くことの基本ですとか、姿勢、あるいは筆づかいのペンの持ち方とか、一つ一つの字のはねやとめを意識するとか、小学校においては基本を身につけやすい、あるいはわかりやすいということが大事なんだなというふうに考えております。

伝統の面ですとか、あるいは社会の慣習といった面を理解を進めやすいという観点から、この教科書を見させていただいて、私は1位にC者、2位にD者を挙げさせていただきました。

どの教科書も書写ということで、例えば各ページの見やすさですとか、字の大きさ、あるいはフォント、いろいろ、それぞれの工夫をされているんですけども、例えばC者は1年、2年の頭にほかの委員の方もおっしゃられましたが、書写体操を掲載して、この教科、書写、書くことに対しての関心を高めたり、導入面で工夫がされているなというふうに感じました。

また、書き順をそれぞれの本で、いろいろ教科書で示しているわけですが、書き順をいろいろな形で示しているわけです。3年になりますと、書、筆、毛筆を使い始めるわけで、



そのとめとかはねの書き順でそれぞれ各社いろいろな色を使ったり、主筆を使っていくんですが、その主筆を使って書き順、あるいは字の形を効果的に示しているのはC者だなというふうに感じております。

それから重さの面でいけば、若干ちょっと重くなってちょっと残念ではありましたが、やっぱり毛筆のほうにも見本がたくさんあったほうが良いということでは、私は実寸見本を含めて、字数の総数が一番多かったD者も捨てがたいというふうに感じたところです。

学校生活や日常生活で役立つ教材としては、いずれもいろいろな題材を扱っているんですけども、1年から6年までの学習のまとめとしては、C者では改めて書写ブックを掲載して、教科書から外して日常生活、ほかの面でも生きるようにしているということで、教科書がより生きていくというふうに感じたところです。

以上のようなことで、1位にC者、2位にD者というふうにさせていただきました。

それでは、樋口委員、お願いをいたします。

樋口委員 一番教科書の選定で悩んだものであります、書写は5者ありまして、いずれも甲乙つけがたい構成になっております。

そもそも書写って何かというと、ここのとおりでありまして、写して書く、書いて写す、どちらかです。そうしますと、子供たちにはよりきれいな文字を見せて、それをそのとおりに書くことがこの学習の最大の目標ではないかと。一週間当たりの割り当てられた授業時間というのは最少時間において、この学習をするというのがこの科目であります、つきましては、やはり最少時間内に効率的に授業を行える教科書ということになれば、必要最小限の項目が入っており、なおかつ授業において負担にならないような教科書がよろしいかなというところでありまして、ページ数の最も少ないものがないかと思いました。

その一方で、先ほど申し上げましたように、きれいな文字を示すというところでは、やっぱり硬筆、毛筆のきれいな文字を生徒に見せることはとても重要で、この点につきまして、C者とD者の教科書は当該学年の配当漢字が硬筆、毛筆で掲載されているということは、ほかの教科書に対して優位性を持つのであろうと。

D者、C者の中でページ数について言いますと、D者のほうがよりページ数が少なくなっておりまして、こうなりますと当然ですが、順位がD者が第1位、C者が第2位ということになります。

その中で、少しさらにDの特徴ですけれども、それぞれの言葉に対して、語彙について扱った項目も掲載されておりまして、文字に対する理解を進めることもD者の教科書は配慮しております。

その一方で、C者については将来の夢・希望を育成する教材として、4年生に夢に一步近づこうという項目があって、現代の子供たちが夢がないとか、将来に対して余り楽観的な希望を持たないとかいう時代において、教科書を使うことによって、言葉から将来の夢を語っていくということはとても重要であろうと思います。

さらに、D者のほうの最大の点は、1学年から年賀状の書き方を教えていることがとても重要で、やはり現代、なかなか年賀状を書かないことが、いわゆる風潮になっておりまして、その点におきましては人に春夏秋冬の挨拶などの最初のところに年賀状を書かせようということについての配慮については、とても日本の文化を守るという意味では重要な点であります。

以上をもちまして、既に言及しましたように、第1位がD者、第2位がC者というところに私は決定をさせていただきたいと思えます。

以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を推した方が3名、それからD者を推した方が1名、E者を推した方が1名です。2位にC者を推した方が1名、D者を推した方が4名となっております

結果として、1位にC者を挙げた方の数が3名と最も多く過半数を超えております。このことにより、書写についてはC者に仮決定をさせていただきたいと思えますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、書写についてはC者に仮決定させていただきたいと思えますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、書写についてはC者に仮決定いたしました。

それでは、C者の発行者名について、指導課長お願いします。

指導課長 仮決定のC者についてでございます。

発行者名は、光村図書。図書の名前は、書写。

以上でございます。

## 社会

矢下教育長 続いて社会についてご審議を願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

今回は、議席番号3番の垣内委員から順にお願いをいたします。

垣内委員 社会に関しましては、社会的な見方、考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通じて、国際社会において主体的に生きる能力を身につけるという目標があると聞いております。

したがって問題解決、問題を社会的な見方に基づいて課題を追究し解決するという、課題解決の能力を養うためのテキストとしてふさわしいかどうかというところを重点的に

確認させていただきました。

各社とも知識、機能の部分、つまり情報量、内容、正確さなど、いずれも十分にバランスよく配置されているかというふうに思いますけれども、この問題を把握し、そして比べて考える、まとめるというプロセス、構造が、特に考えさせるという思考力を、知識は思考力を育むための材料であるというふうに考えて、特に構造化がきちんとなされているという観点で、第1位をC者とさせていただきます。

ほかの者についても、今申しましたように、内容的に情報量その他、問題がないのですけれども、この課題解決というプロセスを踏む、それによって課題解決型の主体的な深い学びができるという意味でC者が断トツというふうに判断いたしましたので、C者が第1位ということにさせていただきます、第2位以下はなしという判断になりました。

C者に関しましては、体験を通した問題解決型の学習の流れに応じて、学習の段階が非常にわかりやすく示されております。例えば5年の授業でもまとめの次に生かすがあり、まとめたことをさらに生かすという学習が可能になっております。また3年については生活環境のつながりというものも意識したような形状もございますし、ほかの学年でもこれまでの学びと、そして今学んでいること、そしてそれをさらにどう生かすかといったようなことが非常にはっきりと示されておりまして、この課題解決型の学習能力の育成という意味では、非常に教える側もやりやすいし、学ぶ側も勉強しやすいというふうに感じました。

また、各社いろいろなインタビューが、付録にさまざまな社会で働く方々のインタビューというのが載っているんですけども、C者の場合は、個人名と顔がはっきり出てきて、よりきちんとした具体的な現実に即した勉強にもなるのかなというふうに考えました。

また、比較しますと文字が、グラフなどの色合いがこちらのC者のほうがちょっと見やすいかなと思いました。

なので、全体の構造、それと幾つかの工夫ということで、C者が1位という判断でお願いいたします。

以上です。

矢下教育長 続いて、高森委員、お願いいたします。

高森委員 社会科の教科用図書を選定においては、まず総合的な観点から、各分野を学習する上でのアプローチの方法、すなわち学習を見通し、調べ、まとめ、活用し、深めていくといった過程を重視した問題解決型学習が取り入れられているかどうか。同時に、基礎・基本の知識の定着が図られているかどうかなどに視点を置き、比較・検討いたしました。

また、個別的な観点からは、地理における領土に関する記述、歴史における戦争に関する記述、公民における人権・自衛隊に関する記述や情報リテラシーの記述などに特に注意しながら文章表現に誤解や偏見を抱かせる心配はないかなど慎重に分析いたしました。

これらの分析を通して、私は1位にA者、2位にC者を推薦いたします。

導入部分について両者を比較しますと、C者の3・4年、並びに5年の上巻、6年の政治・国際編では、いずれも2から5ページにわたって前の学年の既習事項の復習、3年次に限っては2年次の生活科での既習事項の復習と、当該学年での学習事項の案内があり、学習につながりと深まりを把握できる特徴があります。また、C者の4年の6、7ページには、「学び方コーナー」、3・4年の18、19、5年の24から25、6年の政治・国際編12から13ページには、「学習の進め方」を設け、また6年の歴史編の2から7ページには、「歴史学習の基本をおさえよう」を設けて、それぞれの学習の進め方や学びの基本が示されています。

一方、A者には全ての学年において、2ページに前の学年の既習事項の復習があります。3年次に限っては、2年次の生活科での既習事項の復習が確認できます。いずれもC者のように新しい学び方の案内はありませんが、そのかわり、3から5ページ、各学年には、「社会科の見方・考え方」「社会科の学習の進め方」が示され、学びの視点や態度が明確に示されているという特徴があります。A者の魅力は、これらが各学年とも共通したページ構成になっているのに対して、C者は5、6年次を分冊したこともあってか、構成上の統一に欠ける上に、「学習の進め方」に関しては、単元の途中に挿入されるという点が指摘でき、場合によっては取り扱いの際に不便を感じるかもしれません。

各単元の学習の進め方について、両者を比較いたしますと、C者は登場人物の話し合いパートと、知識として学習すべき内容とが明確に分かれている一方で、A者はそれらが折り重なっているような構成になっており、アクティブラーニングを意識した構成になっているようです。

次に、個別の内容について、少し見てまいります。まず、地理分野の領土をめぐる問題については、A者は5年の14から16ページを割いて詳細に学習し、さらに6年の226ページ、227ページでも再度このことにふれて、課題意識の強さを読み取れます。一方、C者は5年の上巻、14、15ページに簡潔にまとめられております。文面の大きな違いは、C者は事実関係の記述にとどまるのに対して、A者はより具体的解決策が示されている点が挙げられます。

次に、歴史分野の近代の戦争に関する記述については、例えば、戦時体制下の国民の生活について、C者よりもA者のほうが紙面を多く割いて内容も充実しており、特にA者は当時の子供たちにスポットを当てて同世代の児童たちに考えさせる内容になっている点で評価ができます。

また、公民の分野の自衛隊に関する記述は、A者では6年の21、51、263ページに見え、このうち21ページには自衛隊の合憲・違憲の解釈にもふれられております。C者では6年の政治・国際編の19、49、103ページに見えますが、そのことには特筆がなく、考える活動にはつながっていません。

以上の分析から、私は、1位をA者に、2位にC者を推薦いたします。

矢下教育長 続いて私でございます。

社会科の教科の目標は、各委員もおっしゃっていますが、社会的な見方、考え方を働

かせて課題解決していくということで、まさしく社会科の学習の進め方、考え方、その流れを理解して活用していくということが極めて大事だと考えております。

そうした面から見ていきますと、A者は教科書のはじめの部分で社会科の学習の進め方として、つかむ、調べる、まとめるというサイクルを示しております。しかし、この示された進め方が教科書の中で体系的に取り扱いを必ずしもされていない。考え方、進め方、解決の仕方を意義づけていくことには少しわかりづらいついて感じております。

B者も社会科の学習として疑問を見つける、調べる、まとめる、伝えるというふうに上げておりますけれども、その意味が必ずしも明確に感じられませんでした。課題解決のサイクルを身につける、考え方、流れを身につけるというよりは、一つ一つの例えば調べるならそのことを丁寧に、教科書では示して、調べるのが課題解決の一過程であるというよりは、何か中心になっていて、課題解決の流れを理解することがやはり若干弱く感じられました。

C者の学習の進め方では、つかむ、調べる、まとめる、生かすという課題解決の流れをしっかりと示した上で、単元の中でもその流れを意識できるように、内容に結びつけてわかりやすく示されておりました。さらに、資料等の扱われている資料は社会では多岐にわたるのですが、その中でも写真資料等を見ていくと、それぞれがよく取り上げられているのですが、加えてC者では写真の色合い、余白等がバランスよく配置されているなども感じましたので、私は1位をC者、2位をB者というふうに挙げさせていただきます。

続いて、樋口委員、お願いをいたします。

樋口委員 専門が経済学なので、社会科の教育については関心があり、なおかつ小学生時代の社会科の教育というのは、非常に社会を観察する目を持つ、育てると重要な科目であると考えます。

それぞれにおいて一長一短があるかと思いますが、甲乙つけがたいと、今、前の委員も言われましたように、特にA者とC者はいずれかということになりますが、前々から私が申し上げましたように、やっぱり子供の負担を考える社会科だけが小学校教育の全てではありませんので、やはり負担の軽いもので、必要な勉強ができる、必要の勉強の重要なところは問題解決型学習だということでありまして、歴史的事実及びある事情を知ることが社会の勉強ではないというのが、現代のいわゆる指導要領に示されている社会科を含めての学習ですので、やっぱり問題解決型に各単元がなっている教科書がよろしいと、こう考えます。

これは教科書選定委員会での調査委員会でもその報告がきております。その中で、やっぱり最もそこにおいて重視されているのがC者であろうと考えます。で、私はC者、第1位C者で、2位以下はなしということで、お願いをしたいと。

そうはいつでも、ほかのものどどこがどう違うのかということについて言えば、やはり先ほど委員が出しましたように、やはり調べる、まとめるということについて、子供たちに積極的にそれぞれの単元について関与ないしは学習をさせる項目があるということは、

C者の大きな特徴であろうかと思えます。さらに、何々の事実を覚えるということではない点が特にすぐれているところでもあります。

ただ1カ所、C者の記述において、ちょっと違和感があるのが、歴史の84ページでしたかね、江戸幕府における貿易が幕府のみが行ったという記述については、これはほかに書いてないところでありまして、独占という言葉がありますが、幕府のみが行っているということについては、ちょっと私は違和感があります。これは必ず教室及び中学において議論が出てくるところだと思います。これは子供たちにほかの資料を見せて考えさせるころではいいポイントではないかと思えます。

以上です。

矢下教育長 続いて末廣委員、お願いします。

末廣委員 私は社会は2者挙げました。第2位がC者、第1位がA者です。

まず2者とも体的に感じたことは、いずれも写真とか図版、絵、地図ですね。これを多用して、わかりやすい構成になっている点です。

まず、6年生を中心にして申し上げますが、6年生は歴史、くらしと政治、世界の中の日本ということでありましてけれども、まず歴史から申し上げますと、これがC者もA者も広げるコーナーというのがあります。これは本文で習ったこと、それ以上のことをどう取り上げるかということで、私はこの広げるコーナーに出版社の編集方針がはっきりとあらわれているのではないかという気がいたします。例えばC者の広げるコーナーでは、平城宮の保存、それから世界遺産は平泉が取り上げられる。時代を追って鎌倉時代のエピソードとか、江戸時代の琉球と蝦夷地ですね。あるいは江戸時代の武士の格好、番頭ですね。それから日本遺産として鎌倉が取り上げられる。また日本医学に非常に貢献があった高木兼寛さんという方ですとか、そういう6年生としても非常におもしろいテーマが出ておりますね。

また生活と政治の広げるというコーナーでは、平和学習のまち広島を訪ねる、川口市の福祉事業を探る、原子力発電所の事故からの復興、路面電車でまちを活性化するなどあります。それから世界の中の日本では、両者とも最も日本と親しい国、密接な関係のある国をいろいろと調べようということで、C者はアメリカ、韓国、中国、サウジアラビア。その四つの国が取り上げられていて、それ以外のコーナーでは、インドとブラジルが取り上げられています。

そういう中で、国際交流をどう考えるか。世界の中の日本の役割はどうなのかというようなことがテーマとして出されております。それに対して、1位にいたしましたA者ですね。A者ではまず歴史に関しては、まず歴史の学び方をナビゲーションする。歴史をどうやって学んでいくか。それから歴史の年表を活用していこう。そういうような本文に入る前に歴史の学び方というのがあり、学ぶものにとって大いに有効であると思えます。

それから先ほども申し上げましたが、本文にない、いろんなことを広げるというコーナーは、Aもありまして、まず時代順にずっといきますと、7世紀ごろの日本の世界との関わ

り、それから文化財の継承、これはC者と同じように平泉が載っております。

それから世界との関わりということで、キリスト教のヨーロッパと日本などがあります。江戸に入りますと、リサイクル都市江戸、世の中の課題と政治の働きを歴史から考えるということで、徳川吉宗の改革に関して取り上げております。

その後、世界との関わりということで、海を渡った武士や侍。また視点を変えて考えようということで、南方熊楠、あるいは石川倉次この二人のことを取り上げています。

更には災害の歴史から考えようということで、関東大震災からの復興ですね。それに功績があった後藤新平の話が載っております。また戦争の時代を知ろう、それから国際社会に果たす役割の例として、日本のノーベル賞の授賞者が全部載って、受賞者の話が出ております。

そういう点で、今の現代的な問題を踏まえた観点から歴史を見ていくという、そういう編集方針が強く伺われる感じがしています。それから世界の中の日本では、これはC者もそうですけれども、やはり個と国家ということをしかりと記述しております。

それから、このA者では日本とのつながりの深い国ということで、4カ国が選ばれておりますが、アメリカと中国とブラジルとサウジアラビア、この4カ国に対して大体4ページぐらいの情報があります。

そういうことで、全体的に地球規模の課題、その解決、これもいろいろな課題がありますので、それを国際協力のもとで解決していこうということで、例えばテロとかユニセフの問題、国際連合の問題ですね。そういうのが記述をしてあります。

全体的に言えば、Aが1位、Cが2位ということです。

以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を挙げられた方が3名、A者を挙げられた方が2名。2位にC者を挙げられた方が2名、B者を挙げられた方が1名となっております。

結果として、C者を挙げた方が3名と最も多く過半数を超えております。このことにより、社会についてはC者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて、付帯意見等はございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、社会についてはC者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、社会についてはC者に仮決定をいたしました。それでは、C者の発行名について、指導課長お願いいたします。

指導課長 それでは仮決定のC者についてでございます。

発行者名は、東京書籍。図書の名前は、新しい社会。

以上でございます。

## 地図

矢下教育長 続いて地図についてご審議願います。発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

今回は、議席番号4番の高森委員から順にお願いをします。

高森委員 地図帳は、学習の質を高めるための「道具」としての意味合いが濃厚な教材となりますので、他の教科と異なり、まずは地図、あるいは地図帳の活用法が具体的に示されているかどうか重要ではないかと思えます。児童は、小学校ではじめて本格的な地図帳を手取るわけですから、地図の意義だとか、利用上の注意点や決まりごと、凡例、活用法などの基本事項は、かなりのページを割いて説明があるべきところだと考えます。また、地図帳は、国語科、理科・外国語科、音楽科、図画工作科などの教科でも横断的に活用されるべき教材となるわけですが、特に社会科に特化してみた場合、地名がわかるだけではなくて、資料図だとか統計表などの資料編の充実度も重要となってくると思えます。

このように資料として有効に活用できるかどうかという点に着眼をして、見やすさ、情報量、利便性などを総合的に判断し、私は1位をA者、2位をB者といたしました。

A者の最大の魅力は、冒頭の18ページにわたって、つまり全体の6分の1ほどを割いて、地図とは何か、地図の約束、地図帳の使い方が詳細に説明されており、これから地図帳にふれる児童たちに地図帳を使って何ができるかを具体的に提示している点が好感を持てます。この点はB者はかなり物足りない気がします。

また、地図帳の基本となる地図の部分でも、例えばA者の60ページとB者の46ページの関東地方の地図を比較していただければ一目瞭然になりますが、文字情報は同じでもA者のほうが見やすく、一方B者はリアリティーを偏重したため、色分けが多過ぎてかえって見づらいかという印象があります。

資料編となる資料図・統計表に関しても、例えば日本の自然の紹介部分については、A者は87ページから4ページにわたって詳細に解説されているのに対して、B者は内容も少なく、69、70ページの2ページに圧縮されています。災害と防災に関しても、A者は91以降4ページにわたって整理され、特に防災に関する説明が2ページを割くなど充実しているのに対して、B者は97ページ以降に折り込みで組まれ、防災に関する記述は1ページの紙面で6分の1程度と分量的にも少な過ぎる点が指摘できます。

このほか教育委員会の調査研究委員会の分析結果も勘案して私はA者を第1位、B者を第2位といたします。

矢下教育長 続いて私です。

社会や地図については、社会や他の教科、英語で外国が出てくればその国のことを調べ



たり、その過程で情報を探したり、例えば索引の使い方を覚えたり、統計ですとか、年表、資料の読み方を覚える。そうした面の育成に役立つといった面から考えております。

地図についての説明をさらに地図帳の使い方について書き方を見ていくと、A者はB者に比べてページを割いて説明をしております。A者は最初に地図の約束から、地図帳の使い方としてその辺を極めてわかりやすく丁寧に説明をしております。情報を探すという観点からは、探し出す、見つけ出すことに関しては、地図の数ではA者がB者よりも多くなっております。また、A者は広く見渡す地図ということで、最初のほうにそういう地図をつけて、地図帳をはじめて使い出す児童にとって、地図帳に慣れていく配慮がされている。そういう点がいいなというふうに思っております。

例えば地図帳で場所を特定するといったことでは、B者のほうが地名等の情報量が多くなって、一瞬いいとは思いますが、例えばそれはその児童にとって情報を探すという訓練をするという意味からは、A者のほうの地図がそういう意味では逆に使いやすいというふうに考えるのかなというふうに感じたところです。

以上の申し上げた点から、私は1位というか、A者を推薦させていただきます。

以上です。

続いて、樋口委員、お願いをいたします。

樋口委員 もう既に前の委員が言われているところでありまして、漫画でいろんな地図を出されているところと、そうではなくてやっぱり文字で解説しながら地図帳の使い方を説明しているところでは、A者とB者では歴然の差があります。なおかつ、地図というのは、まず地図情報に加えまして、現代の我々を取り巻く社会の状況を情報として取れる有効な資料でありまして、その情報量がどちらが多いかということも、次に考慮すべきところでありまして、この2点を考えればA者を1位とせざるを得ません。

あと、やっぱりA者のほうが子供にとっては使い勝手がいいかなとは思いますが、なおかつ、地図の量ですけれども、やっぱりA者のほうが圧倒的に多くなっております。特に日本の地図につきまして、A者は96図に対しまして、B者は72図にしかならないということで、やはり圧倒的に地図情報がAにおいて多くなっておるというところがあります。

あと、国土利用、自然環境等々の資料につきましても、A者のほうがやっぱり多くなっております。情報資料として非常に重要なものと考えられます。

以上でありまして、第1位A者、第2位なしということでお願いします。

以上です。

矢下教育長 続いて末廣委員、お願いいたします。

末廣委員 私も地図に関してはA者、第1位でございます。今のお話があったように、A者は地図の情報量が非常に多いですね。B者とちょっと見比べてみますと、A者は、世界地図見開きで3ページありますが、主な国の国名が入っています。B者のほうは同じ世界地図が出ているんですけれども、それぞれの国の自然とか、動植物とか建築物とか、特産品等の絵が入っていて、国名が全然入っていない。これも一つの考え方もかもしれませんが、で

できれば世界地図、子供たちが見たそこにこういう国があるんだという。主な国だけでいいと思うんですけど、せっかくですから、それはあったほうがいいと思います。

それから地図を見ていこうというときに、いろいろと説明があります。A社は地図って何だろうと、まず上から見ていくんだという、そういう話が2ページにあります。それから地図の約束というのがあって、2ページは方位ですね、方角、方位に関する約束、それからもう2ページは地図の記号に関する約束、その記号はこの記号はどうしてこれをあらわすのかという、その意味を説明してあります。

それから地図の約束、その後3番目ですが、距離を求める、地図から大体何キロか、距離を求める。この約束が全部で6ページあります。その後地図帳の使い方が4ページありますね。

それに対して、B者のほうは、まずまちを上から眺めてみよう。それが2ページです。それから真上から見るとこの地図になる。これも2ページですね。それから市を見渡してみようという、それが2ページ。これで6ページも使っているんですが、ある意味ではちょっともったいないかなと思います。それで、地図帳の約束というのは余り細かく書かれていなくて、地図帳の使い方が2ページですかね、それから日本とその周りという感じで出ております。やはりこれは実際に使っている子供たちにとっては、A者のほうがはるかに使いやすい、地図の持つ意味を理解する上ではわかりやすいと思います。

あと細かいところで、いわゆる産業の様子とか観光とか貿易とか、そういう地図を使った説明がありますけれども、その分量に関してはほとんどA者、B者、差はないのですが、全体的には地図の数にしてもA者が94、B者が70ということですから、やはり地図というのは情報がたくさんあったほうがいいんじゃないかということで、A者をとりました。

矢下教育長 続いて垣内委員、お願いいたします。

垣内委員 もう既にほかの委員の方々がご指摘されているように、課題を把握し解決するという上で、さまざまな科目で地図というのは重要な役割を果たすかと思います。その観点から、地図というのは基本的にいろいろなルールというか、読み方とか書き方とかあるわけですから、そういった約束事、使用の仕方というものをきちんと提示されていて、できるだけ基礎的なデータ、情報量が多いということが、これをこの後活用して、さまざまなことを考えるときに、非常に重要なポイントかと思います。

この2点からいって、第1位がA者、第2位はなしということにしたいと思います。A者は資料が多くて情報量も多様ですが、少し軽いというところも評価の対象になっております。以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者名についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げられた方が5名、2位にB者を挙げられた方が1名となっております

結果として、1位にA者を挙げた方の数が5名と最も多く過半数を当然超えておりますので、このことにより、地図についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、地図についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、地図についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、指導課長お願いいたします。

指導課長 それでは仮決定のA者についてでございます。

発行者名は、帝国書院。図書の名前は、楽しく学ぶ小学生の地図帳。

以上でございます。

## 算数

矢下教育長 続いて算数についてご審議を願います。発行者は6者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

今度は議席番号5番の私から順に発言をいたします。

将来にわたって数学的な思考、あるいは理解の基本となるので、まず小学生になつての導入をうまく始めることが、この算数という科目にとっては大事であるというふうに考えております。

数学的な思考を身につけるためには、その勉強の仕方、特にノートの使い方等が大事というふうにも考えております。各単元で学んだことを身につける点はどうか。さらに教科書には補充や家庭で学習するための内容や工夫はどうなっているのかというようなことを見て決めさせていただきました。

私は1位にC者、2位にB者を推させていただきます。大きさについては、私はできれば大きくないほうが良いというふうに考えておりました、大きいのは若干マイナスと考えたのですが、C者の1年生の1冊目が今回大きくなっております。例えば何か物やカードとかを直接置いたりするときに使いやすく、算数的な見方、考え方を導入しやすく、理解しやすくなっているというふうに考えられました。その点を今回は大きい、改めてほかと比べて大きかったんですけども、その点は評価をさせていただきました。

それからノートの使い方、取り方が大事というふうに申し上げましたが、各教科書にそれぞれの考え方、書き方が説明をされているのですが、その説明の見やすさですとか、説明のわかりやすさといったことから見ると、C者、あるいはB者がよりわかりやすい、見やすくなっているというふうに思っております。

それから各単元の内容を身につけるといふ、ある意味での復習の問題についてもそれぞれの教科書にあるのですけれども、C者にも学習問題がありまして、その単元で習った学

習で、特に伸ばしたい数学的な見方、考え方を重点に置いて振り返ることができるページをおいている点はいいのかなというふうに思っております。

また、C者は学びの扉で算数への基本的な取り組み方を示しております。その上で教科書を使った学習の仕方を示しており、その説明も非常にわかりやすくなっております。

B者では、さあ算数の学習を始めようということ、算数の考え方、教科書を特に丁寧に説明をしている点が、またすぐれているなというふうに思っております。

そうした点から、先ほど申し上げたとおり、1位にC者、2位にB者を推薦させていただきます。

続いて、樋口委員、お願いをいたします。

樋口委員 算数ですけれども、来年度からプログラミング教育が導入されまして、算数の科目でプログラミング教育が行われることになりました。したがって、このプログラミングをどう扱うかということが今回の算数の教科書の重要な選択要因になるんじゃないかと、こう思います。いつから教えるかということです。

これは6者を見ますと、A者は5年生のみ、B者も5年生のみ、C者は5年、6年、D者は1年から6年、E者も1年から6年、F者は5年ということでありまして、先日、実はこのプログラミング教育につきまして、全国大会がございまして、PCカンファレンスという、神戸でありまして、そこに参加しまして、八王子及び杉並区、あとは名古屋の小学校の先生方がプログラミング教育について教育内容等、成果について報告がありました。全部で6点あったんですが、この中で、今までのプログラミング教育、現場では総合学習で行われておりましたということでありまして、その成果についてどうやって教えますか等含めての講演につきまして、発表につきまして質問させていただいたんですが、そもそもプログラミング教育は1年生から教えるのか、それとも高学年で教えたほうがいいのかという質問をさせていただきました。各教員は望ましいのは1年生からだということでありました。しかし、今の小学校の先生方の現場では、先生のほうが今は大変ですと。1年から教えるとなると、これは1年生に迎えて、生徒を指導しながら、プログラミングを教えるということは、実質的に無理ではないかという回答がありました。望ましいのは1年から教えたほうがいいんですが、実際には高学年で教えるところが今の働き方改革を含めての実用性が高いだろうということでございまして。それを見ますと、C者かなと、こういう感じがいたします。

それを中心に、C者の教科書及びその他を見ても見ますと、C者につきましては、軽量であり、なおかつ幼児期に育った数及び量への関心を感じさせる項目がしっかりしておりまして、あと振り返り問題についても、適度に配置されておりまして、自己学習においてもちゃんと答えを示し方もうまく出されているんじゃないかということで、昨今言われています数学、算数嫌いについて、うまくイラスト写真を用いて算数のおもしろさを教えているかなという感じがいたしまして、1位をC者にさせていただきました。

次に、もしできればの話でD者ですと、これは1年から6年までプログラミングがありま

す。このD者の特徴ですけれども、いわゆる巻末の問題集が非常に適度になっておりまして、これは自己学習するには適度に練習問題があるかなという感じがします。

その他については、6者遜色ないのですけれども、私は今回新しく導入されるプログラミング教育のスタートを選択のポイントにして、このような順位をつけさせていただきました。

以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員、お願いをいたします。

末廣委員 私は算数はD者が2位、C者が1位でございます。算数というのは、今までずっとお話がありましたように、いわゆる論理的な思考、またそれを表現する。これが非常に重要視されると、この力を養うということになると思います。

この論理的思考というのは、中学の数学に当然つながっていきますので先生方も頑張っていたきたいと思います。

算数の学び方というんですかね。学びのナビゲーションというのはがまず言われております。まず問題をつかむ、何が問題か、これがやはりだんだん高学年になってくると、それもよくわからないまま授業を聞いているということもあり得るんですね。その単元で何を学ぶのか、それで問題をまずはっきり把握しようとさせますね。それで、自分でまず考えて、そしてなおかつ授業であったことをお互いに学び合う。最後にはまとめて振り返るという、これはD者でやられているその手順ですけれども、それが基本的にはC者でも同じだと思います。

問題に対する自分の考え、あるいは友達の影響、それを合わせてまとめてみるということですね。そういうのが大事だということです。算数の授業での聞き方というのも提示されております。それから確かめ問題があって、D者では「ふくろう先生のなるほど算数教室」というのがあって、いろいろな問題をこのコーナーで扱っています。

例えば5年生だと7つ、6年生になりますと14、このふくろう先生の算数教室があります。これがD者ですけれども、1位のC者では、やはり同じような学びのナビゲーションといいですか、扉があって、まず問題をつかもう。その次にマイノートをつくらうという提案があります。それで学習の入り口があって、その学習の仕上げがあるという。それをノートで記しているんですね。それから学習の仕上げでは、今習ったことを生かしてみよう、あるいは確かめてみようなど、そのような提案がずっとあります。きょうの深い学びということで、マイノートはその学習に生かしていこうということで、これは具体的に5の下に詳しく載っていますが、このマイノートの活用は子供にとって大いに有用だと思います。

やはり先ほど申しましたように、まず算数では課題を明確にする。まず自分の力で解決していこうとする。その上で話し合い、お互い友達同士との話し合いでよりよい考え方があれば、それで訂正していく。それがいわゆる主体的な学びということになると思います。これからの日本ではこういう主体的な学びが非常に大切だということで、先生方も大変だと思いますが、それができれば理想的な算数の授業になるんじゃないかと思います。

C者では、それぞれの本文の中に、その都度キャラクターが出てきて、その問題の考え方とか見方とかをアドバイスしているのですが、これは子供にとっては非常に大きなヒントになるんじゃないかと思います。

総合的に考えて、算数はC者が1位といたします。

矢下教育長 続いて、垣内委員、お願いをいたします。

垣内委員 算数に関しては、理論的な思考を養う、数学的な見方、考え方という能力を養うということと同時に、数的処理の仕方を身につけて、その楽しさに気づいたり、生活やほかの学習に生かしていくということが求められているという理解のもとに、問題解決型であるとか、筋道を立てて考えるものであるかという観点から、使いやすい教科書なのかで比較をさせていただきました。

結論として、私はC者が第1位、第2位がD者ということにしたいと思います。まずほかの教科書も全て数学的な活動意義としては問題解決型の授業展開を目指した構造になっているという点、それからキャラクターなどを多用して、算数が嫌いになるとかドロップアウトの人たちをできるだけなくそうという工夫がされていること。また復習問題があったり、算数ノートとか教科書によって読み方が違いますが、さまざまなノートをつくって、自分なりの考え方を身につけていくというような工夫が全ての教科書においてなされているわけですが、特にC者の場合は、課題を明確にして見通しを持って自分で解決をするということと同時に、話し合いを通してよりよい考え方に、考え方を高めようといったような学習展開が見れるということで、より主体的な学びができるのではないかというふうに考えられます。

また、学びの扉、それからマイノートというものをつくることによって、学習へのリード部分、導入部分になっていますし、先ほどほかの委員の先生もおっしゃいましたが、生かしているような、つないでいこうということで、さまざまな展開を可能にしているというところも高く評価したいと思います。

あわせて、特に1学年の場合に、ちょっと大きめの算数の扉という分冊を用意されていて、これが非常にイントロダクションとして小学校に入ったばかりの子供たちに、数の考え方を身につけていただく上で参考になるのではないかというふうに思いました。

あわせて、重要な考え方、例えば長さとか体積とか広さとかについては、一つの単元で一つのテーマということを提供しておりますので、これによってドロップアウトする方々が少なくなるのかなという点も高く評価できます。

ということで第1位はC者、第2位のD者につきましても、非常によく工夫がされておりまして、算数学びナビ、これについては既にご説明がありましたので省略いたしますけれども、そのほかに自主学習に当てられるような確認問題というものも用意されております。

またプログラミングに関しても、非常に丁寧に準備がされているのかなというふうに思いましたが、全体を総合的に判断いたしますと、C者がきめ細やかなプロセスを用意しながら、次の展開につながるような構造を持っているのかなということで、第1位はC者とさ

させていただきます。

以上です。

矢下教育長 続いて高森委員、お願いをいたします。

高森委員 数学科では、冒頭に申し上げました三つの視点のほかに、児童の興味・関心を高める工夫がなされているか、日常的な身近な題材が活用されているか、他教科との関連が明示されているか、個々に応じた指導が可能かどうか、ドリル的要素となる問題数の分量が適切かどうか、補充・まとめ・発展学習などが充実しているかといった点に着眼し、比較・検討いたしました。

これらの分析を通して、私は、1位にD者、2位にC者を推薦いたします。

まず、算数科を学習する上でわきまえておくポイントについて、D者は巻頭の「算数まなびナビ」で丁寧に解説されています。算数科で特に重要となるノートの取り方や、論理的に意見を述べる際の話し方、相手の意見を聞く際の聞き方のポイントなどについての説明もあり、算数科を学ぶ上での態度や方法を学習するつくりになっている点ですぐれていると思います。

一方、C者には、導入部分にそれらの紹介はなく、ノート作成の参考例として、要所要所に「算数マイノート」のコーナーが設けられておりますが、C者の場合は当該単元に至らないとノートの取り方を学べないということになりますので、学年の最初にまとめられているD者のほうが好ましいのではないかと感じました。

次に、児童の興味・関心を高める工夫、及び日常の身近な題材の活用について見てみたいと思います。とかく算数は日常とかけ離れたところでイメージされがちですが、実は日常生活では、国語科に次いで、これほど多用されている学問はないわけで、そのことを児童が自覚できる内容となっているかが鍵となります。

例えば、円の面積について学習するC者の6年生の104ページ、D者の6年生の39ページを比べてみますと、この場合、D者のほうが、より身近な題材を例に考えさせる内容になっており、単元のつかみとしては効果ありと認めました。当該単位に関して言えば、C者はいきなり本題に入る感覚です。単元の導入部分で日常の算数的営みを積極的に題材として用いるということは、児童の興味・関心に直結する部分だと思しますので、D者は効果的な活用がなされていると思しました。

また、学習内容の充実度について一つだけ取り上げて比較したいと思いますが、6年生で学習する「比例・反比例」を比較したいと思います。比例の考え方は、理科などの他教科、中学校の数学科の学習においても大いに活用できる頭脳トレーニングになります。速度や割合や濃度、あるいは図形問題の解き方、各種文章題から方程式を導き出す際にも、比例を念頭において考えると、機械的かつ容易に式を立てることができます。また日常生活においてもさまざまな場面で活用が期待されます。

そうした点に着目したとき、C者の場合は6年の136ページから162ページにわたり、D者の場合は6年生の169から190ページにわたって、充実した内容で比例・反比例の学習を展

開します。特にD者の場合は、面積・体積・容積・重量・速さなどなど、日常生活にも密接にかかわる実例を数多く挙げて、繰り返し学習をさせている点では、問題意識をもって力を入れている感じがします。

なお、今回候補には挙げませんでしたけれども、参考までに、F者は巻末の「広がる算数」の中で「身のまわりには比がいっぱい」のコーナーを開設し、農業で用いられる円筒分水、二次元コードや黄金比などを題材に紹介しており、算数や数学で学ぶ比の活用の幅の広さを知ることができます。

続いて、各学年の学習内容のまとめについては、分冊になっているC者は、同一学年でも下巻には上巻の既習事項のまとめが掲載されていますが、基本的にC者、D者2者とも前の学年の既習事項のまとめが巻末に掲載され、当該学年のまとめは復習問題という形で提供されています。この点に関しては、当該学年の総まとめも欲しかったところですが、復習問題で代用するという理由でしょうか。

次に、中学校の数学への接続については、2者とも6年生の巻末に見えますが、いずれも数学というよりも算数的考え方を数学的学習へつなげていくという内容になっており、数学の学習が楽しく思えるような工夫がなされています。なお、D者はこれに加えて、6年生の232ページから3ページにわたって、具体的に数学の単元の事例を挙げ、小学校の学びと数学との関連性を提示している点が特徴的です。

以上、細かな部分では2者ともに優劣つけがたいところではありますが、それぞれの比較項目を総合的に判断して、私は1位にD者、2位にC者を推薦いたします。

以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局のほうからお願いいたします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を挙げられた方が4名、D者を挙げられた方が1名でございます。2位にD者を挙げられた方が3名、B者、C者を挙げられた方がそれぞれ1名となっております。結果として、C者を挙げられた方が4名と最も多く過半数を超えております。このことにより、算数についてはC者に仮決定をさせていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

樋口委員 ちょっと1点いいですか。

算数こそ、つまずくとなかなかいよいよ復活が難しいというところがございます、やはりどうしてこうなるかということについて、授業参観させてもらおうと、わかる子供はもう早く終わっているし、わかんない子供は何だかわかんないけど鉛筆動かさないで授業が終わるのを待っているというような状況がよく見かけられる。ぜひともちょっと工夫をしていただきたいんですけど、算数こそグループ学習でお互いに教え合うという工夫をしていただけないかと。プログラミングこそ、わかる子供がこれから始める子供を教えるということとはとても重要ではないかと、これを逆に今までどおり算数の計算でできた子供



とできない子供を評価するということになる、できない子供はもういいやということにもなってしまいます。しかし、このプログラミングというのは、これからの我が国の社会の産業の展開においてはとても重要な基礎だということと言われておりまして、まさに小学校時代にしっかり理解を深めるということが重要だと思いますので、ぜひともこれまでどおり先生の顔を見ながら授業を受けるということを少し工夫して、算数嫌いをなるべく生まないようにしてほしいと思います。

以上です。

指導課長 いずれの教科書を採択されるかは委員の皆様方のご判断となりますけれども、いずれの教科書が採択されたといたしましても、算数嫌いをなくすため、また算数の能力の高い子がさらに伸びるため、まずは自分の考えを持つ、そして自分は何がわからないのかを自覚する、その上で机を並べた上で意見交換をするような、効果的なグループ学習の展開に努めていきたいと思います。

矢下教育長 よろしいでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、算数については0者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、算数については0者に仮決定いたしました。

それでは、0者の発行者名について、指導課長お願いをします。

指導課長 それでは仮決定の0者についてでございます。

発行者名は、東京書籍。図書の名前は、新しい算数。

以上でございます。

矢下教育長 議事進行中ではございますが、昼食時となりましたので、ここで一時中断し、休憩をはさみたいと思います。なお再開は、午後1時10分といたします。よろしくお願いいたします。

それでは、これより休憩といたします。

(休憩・12:15～13:10)

## 理科

矢下教育長 それでは審議を再開させていただきます。

続いて、理科についての審議を願います。発行者は6者となっております。なお、うち1者については、見本本がないため、審議の対象とはいたしません。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

樋口委員から順にお願いをいたします。

樋口委員 理科ですけれども、これは算数と同様に現代の若い人たちに苦手意識を持た

せている科目の一つであります。重要な点は科学的なものの見方、考え方をどう育成するかというところでありまして、実際に観察をして、実験をして、その結果を導き出しながら、その観察結果、実験結果をどう考えるかということについて教える科目であります。

つきましては、重要なポイントは問題解決型で、問題を考え、その結果を予想し、観察、実験結果を得て、その得た結果をどう評価し考えるかということについて、しっかり一貫した章立てになっているかどうかという内容になっているかというところが、重要なポイントであろうかと思えます。

つきましては、5者の中で1位をB者、2位をA者にさせていただきます。B者ですけれども、重さがちょっと難点で、2番目に重いんですけれども、しかし先ほど申し上げましたように、観察をし、実験をし、それを結果を得て評価をするというところでの記述について、ないしは問題解決型のプロセスについてわかりやすく同科目の関心を高めさせる工夫があるというところで評価をするものであります。

実際に、その実験の中身につきましては、キャラクターを使って発言させながら、それぞれの過程におけるポイントをしっかり理解させるようにしております。これがB者を1位にした大きな理由であります。

2番目にA者ですけれども、巻末にノートの書き方、学習に関する資料等々主体的に学ばせる姿勢は見えますけれども、B者に比べて少し劣るのではないかと思いました。他者について言及をいたしますが、それぞれ工夫がされておると思うのですが、今挙げましたB者は少し子供の関心の持たせ方について、内容で劣っているかなという感じがいたします。以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員、お願いをいたします。

末廣委員 私は2者を選びまして、そのうちA者を2位、B者を1位にいたします。

お話がありましたけれども、算数と理科というのは、いわゆる理系の教科というふうにいわれ、現在は特に私立大学あたりは文系、理系というふうに分かれているわけですが、今文科省はこの文系、理系を分けなくて、将来的には文理融合といいますか、文系も理系の勉強をする、そういう方向づけをしているようです。

そういう点で、今の子供たちに理科が苦手、算数が苦手という子がいると思いますが、なるべくそういう苦手意識をなくしていく必要があるのではないかと思います。

まず2位にいたしましたA者ですね。これもやはり問題提起から自分で解決していくという筋道を示しています。まず問題があって、そして予想をする、そして計画を立てる、実験をする、それをその結果を考察する、そして最後にまとめていくという、こういう筋だった勉強の仕方がいいということですが、B者も理科の学び方としては、まず問題を見つけよう、そしてどういう問題があって、どういうことを考えなくてはいけないかという予想を立てる、そしてはっきりわかれば計画を立てる、これはもう実験のコースにいけますけれども、調べようというのは実験で調べる。それで記録しようというか、その結果を記録している。そして考えよう、考察してまとめよう、そしてなおかつ結論が出たらそれを

確かめて、学んだことを次に生かしていくという、そういう過程がA者よりも細かく考えられています。

B者のほうでは、コーナーがいろいろとあって、トライというのはいろいろと深めていこう、それから資料としては理科の玉手箱、あるいはサイエンスワールド、このようなコーナーがあって、理科のいろいろな項目を生かし、理科への興味をより深める工夫をしています。また、A者とB者関係なく、理科はやはり実験等を行いますので、教科書にはこの点を注意しよう、この点危険だというマークがどんどん入っています。それはA者のほうは危険というマーク、B者のほうは注意というマークが入っていて、理科実験のいわば薬品とか使うときに、こういう注意をしろということが明確に出ています。

そういうことで、両方ともいい教科書なんですけど、私としてはAが2位、Bを1位といたします。

以上です。

矢下教育長 続いて、垣内委員、お願いいたします。

垣内委員 理科の場合は、科学的な見方、考え方というものを養いながら問題をどう解決するのかということが、この教科の目的であるというふうに理解した上で、最も子供たちに使いやすく、親しみやすく、そして教える側の教員の方にも教えやすいような形での導入、それから構造化がなされているかという2点を、重視しながら比較検討しました。

結論としては、B者が第1位、D者第2位といたしたいと思います。いずれの教科書におきましても導入から問題予想、そして実験、また結論までのプロセスというものも示されていますし、理科のノートをつくったり、プログラミング教育にふれていたり、前の学年との内容からのつながりがわかるように提示があったり、非常に工夫がなされています。大切な事項については太字というところも全ての教科書に通じるところかと思えますけれども、B者を第1位にした理由ですが、特にどういう問題、予想、実験、観察方法ということで一つのページになっている単元が多くて、非常にわかりやすい。また、主体的な学習を促すという観点からもいいのかなというふうに思いました。学び方、見つけよう、調べよう、つなげよう、伝えようというようなことで、得た知識をどういう形で使っていく、そしてまたそれを社会全体に広げていくのかという視点、学習態度というんですかね、そういうプロセスを学ぶということが出来るんだらうということで、非常にいい教科書であろうというふうに思いました。

もう一つ、実験に関して、非常に丁寧にその手法だけではなくて、そのプロセスも説明しております。例えば5年生の126ページから振り子の動きがありますけれども、これを何回か計測をしまして、その結果を、実験の結果を平準化するという一般的な観察、それから実験の手法も自然と学び取れるような、そういう形での展開になっている点も非常にいいかなというふうに思いました。

一方、第2位のD者ですけれども、D者につきましても導入から問題の予測、観察方法等で1ページになっている単元が多くて、非常にはっきりとわかりやすいし、ノートの書き

方についてもきちんと示されています。また、はてな問題のところ、見つけよう、予想しよう、計画しよう、結果から考えよう、結論という形で、非常にプロセスがわかりやすいという点で、いいかなというふうに思いましたけれども、先ほども申しましたように、実験の実際のプロセスについて非常に丁寧に説明されているB者のほうを第1位とさせていただきます。

以上です。

矢下教育長 続いて、高森委員、お願いいたします。

高森委員 理科の選定に当たりますとは、まずは学びの視点や学び方が明確に示されているか、予測・計画・観察・実験・考察等といった問題解決の手順が的確に示されているか、身近な現象・事象との関連性が示されているか、図版・写真は適切かつ効果的に活用されているか、器具の使用法や実験時の安全面へ配慮などが明記されているか、ICT・デジタル教材は効果的に活用できるようになっているか、などを主な視点に比較いたしました。

これらの分析を通して、私は1位にA者、2位にB者を推薦いたします。

推薦理由として、まずあまり着目されてない部分かもしれませんが、私は目次の場所について気づいたことがあります。多くの教科書は理科に限らず、一般的にB者のように教科書の表、つまり表紙をめくった裏面、あるいは見返しなどに目次へアクセスするのが普通なのですが、A者の場合は表4、つまり裏表紙に目次が組まれています。実はこれが大変便利で、わざわざ表紙をめくって目次を探す手間がかかりません。この方法は、他教科にも活用されるといいなと思いました。

次に、理科の学習の方法論について、A者は全学年とも巻頭4・5ページに見開きで「理科の学び方」が、一方B者は2ページ、3ページに「理科の学び方」、4、5ページに「教科書の使い方」がそれぞれ用意されています。ページ数で見れば、B者のほうが多くを割いていることがわかりますが、実はA者は4、5ページ見開きの「理科の学び方」の中に教科書の使い方もしっかり盛り込んで記載されているため、一度に全てを系統立てて理解することができます。B者ではそれぞれが分断されているため、両方を並行して見なければならぬという煩わしさがあり、また文章も重複するという無駄も発生してしまっていて、かえってわかりづらくなっています。

本編の各単元の内容について比較したことをここで全て述べることはできませんけれども、全体的にA者は、観察実験数、資料数なども充実しており、問題解決に至る過程の説明、写真を多用した観察・実験の実例など、授業の円滑な進行や児童の学習理解にも十分に配慮した構成になっています。

一つだけ具体例を挙げれば、6年生で学習する月の満ち欠けに関する実験では、A者では97から99ページにわたって多くの図版を用いて提示されているのに対して、B者では97ページのわずか1ページしか用意されておらず、この点だけを見てもB者は児童の学習理解に十分な内容になっていないことが指摘できます。

付録的な扱いとなる巻末の資料についても、A者は理科の調べ方や問題解決の手順に呼応する形で、記録・発表・観察・実験・活用の五つのカテゴリーに整理され、まとめられています。B者はカテゴライズされておらず、ただ単に列記しただけの編集となっております。特に理科の学習で大切なのは、ノートの取り方ではないかと思うのですが、例えば理科の最初に学ぶ学年の3年生で比較した場合、A者の161ページとB者の182ページをご覧いただければおわかりのように、A者は実験のノートを使用したようなイラストになっていて、実にわかりやすく書かれてありますが、実際のノートを使用したようなイラストになっていて実にわかりやすく、またノートの使い方も、予測・計画・観察・実験・考察等といった問題解決の手順が欄外に設けられて一目瞭然になるように工夫されていて好感が持てます。一方のB者は、ただ手順を羅列した形になっており、これでは後で見返したときに判然としないように思われます。

次に、器具の使用法や安全面への配慮では、例えば、理科室の決まりごとについては、A者は4年の198・199ページ、B者は4年の208・209ページを比較いただければおわかりのように、A者のほうが見開き全面を使って豊富なイラスト、詳細な文字情報をもって記述されていることが指摘できます。4年生から器具を扱う実験も増加するので、器具の準備・確認・使用そして後始末など取り扱い上の注意点は、この学年からしっかりと伝えていくべき部分だと思います。この点でも、B者よりA者のほうが充実しています。

もう一点、B者のほう安全面への配慮ということでは、例えば、3年生の71ページに音の伝わり方の実験の部分で、糸でんわを使う場面があるのですが、糸では、それほど注意は必要ないのですが、その下には、針金を使って同じような実験をしている場合があります。針金を使った器具を顔のそばにもって引き合うこと自体が私は少し危険ではないかなという意味では、安全面の配慮が少し欠けるのではないかと思います。

次に、ICT・デジタル教材の活用について、これは前回5年前の理科の教科用図書採択では思いのほか多くの箇所にアイコン表記があったのを記憶しておりますが、今回は両者とも思ったほど多くないのが特徴です。恐らくデジタル教材の活用については、必ずしも児童向けに表記する必要はないため、教師の指導書等によって明記されているのだと思います。なお、A者は巻末に「インターネットを使ってみよう」のコンテンツを用意して、教科書にアイコン表記したページを一覧にして記載してある点が便利だと思いました。

以上の考察によって、私は、1位にA者、2位にB者を推薦いたします。

以上です。

矢下教育長 それでは、私でございます。

私は理科については、理科の考え方を将来にわたって、子供たちにどのように身につけてもらいたいかということで、やはり理科の学び方ですか、考え方をどのように教科書の中で示しているか。また、その理科の学び方を教科書の各単元でどのように具体化しているかという点を中心に見ていき、1位にB者、2位にA者とさせていただきたいと思います。

A者は、理科の考え方を大きく3点、問題をつかむ・調べる・まとめるとしており、さら

に、例えば調べるであれば、その後、その先に、予想しよう・計画しようとして、その先に実験・観察があるといったふうな構成で進めております。対象の内容によって若干その進め方、観点が違ってきますけれども、理科の学習の仕方自体は、各単元に工夫されて展開をしていると伺えます。

B者は、理科の学び方を見つけよう・調べよう・伝えようの3点で、さらに例えば、調べようでは、その中に予想・計画・観察・実験・結果が入ってまいります。教科書の使い方にもこの3点がはっきりと示されていて、各単元でも見つけようからの順に構成をされております。主体的に児童が考えるにしても、この方法サイクルをいつも意識しながら学習を進めていくのは理科の考えを身につけるために有効であると考えました。

C者は理科の考え方を1、問題を見つけるから予想する・計画する・調べる・整理する・結果から考える・まとめる・生かすの8点で流れを示しております。

単元では、この流れに沿って進行していくんですけども、児童に考え方を身につけさせるという点では、ちょっとこれらの8点の表現が教科書中弱く感じております。

D者は、学習の進め方の中で、見つけよう問題・予想しよう・計画しよう・観察・実験結果から考えよう・結論・学びを広げようと、この考え方を示されておりますが、教科書全体では問題・観察・実験、そして結論が強調され過ぎていて、理科の流れ全般をきっちりしていくためには、ちょっと強調され過ぎているのかな、3点が協調され過ぎているのかなと感じております。

E者では、大きく3点で、1見つける、2調べる、3振り返るとしてありますけれど、各単元の内容を進めていく上では、この理科の考え方に沿って進めていくには、あまり各単元の内容がどうも配慮されないで進行していく感じがいたしました。

そういうことで、今申し上げましたように1位はB者、2位にA者とさせていただきます。

ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局にお願いをいたします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にB者を挙げられた方が4者、A者を挙げられた方が1者、第2位では、A者を挙げられた方が3者、B者とD者を挙げられた方がそれぞれ1者となっております。

結果としては、1位にB者を挙げた方が4名と最も多く過半数を超えております。このことにより、理科については、B者に仮決定をさせていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

樋口委員 B者のみ6年生の教科書で国立科学博物館を紹介しております。本区は、上野動物園、科学博物館、これはもう日本の宝ですが、児童は容易にそこを利用できる状態になっておりますので、この理科の学習に応じて、上野公園及び科学博物館の使い方を教員は積極的に案内して、理科学習のさらなる理解増進を各自にしていただければと思います。

指導課長 上野の森につきましては、理科のみならず社会科、総合的な学習の時間など

も含めて、発達段階によっては、幼児期から、それから中学生まで、さまざまな場面で活用させていただいております。つきましては、今後もさらに活用していくように指導してまいりたいと思います。

矢下教育長 よろしいでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、理科については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、理科についてはB者に仮決定いたしました。

それでは、B者の発行者名について、指導課長お願いいたします。

指導課長 それでは、仮決定のB者についてでございます。発行者名は、大日本図書。図書の名前は「楽しい理科」、以上でございます。

## 生活

矢下教育長 続いて、生活についてご審議を願います。発行者は8者となっております。なお、うち1者については、見本本の発行がないため、審議の対象とはいたしません。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。末廣委員から順にお願いをいたします。

末廣委員 私は、この生活、第2位にG者、第1位にA者を選びました。

この生活という教科は、低学年のためのいろいろな学習があります。まず、2位のG者ですけれども、いいところは植物の種、それから芽、花ですね。これらが非常にわかりやすい。特に自然系はG者がとても優れていると考えます。

それから、最初に出てくる通学路の安全とか、学校の安全という安全の意識についての記載が非常に良いと思います。

それから、巻末に「ポケット図鑑」とか、「活動の便利手帳」とか、いろいろと資料がありまして、これらも良いと思います。

それから、1位のA者ですが、上と下に分かれていますけれども、テーマが統一されている。上では、「なかよし」というテーマ。下では、「はっけん」というテーマです。上は、「みんななかよし」、「なつとなかよし」、「あきとなかよし」、「ふゆとなかよし」。それから下は、「春はっけん」、「生きものはっけん」、「わたしの町はっけん」、「つくるたのしきはっけん」、「自分のはっけん」ということで、子供にとってもこのタイトルだけで非常に内容がわかりやすくなっていると思います。

それから、Aの特徴としては、写真がとてもきれいですね。Gも悪くないのですが、Aは特に写真が良いと思います。

それから、Aは家族のことを多く取り上げています。例えば、上では、「家族と過ごす夏休み」とか、「かぞくはなかよし」、これで8ページとっています。それで、いわゆる

下のほうでも家族のことが取り上げられていて、ほかの出版社に比べますと家族というものを特にクローズアップして、大切にしている面があると思います。

それから、先程の写真のことを言いましたけども、「秋の色はどんな色」と出てきて、最初は白黒の写真です。木々の白黒の写真がばんと出てきて、次のページをめくるとカラーの紅葉の写真が出ると。そういう写真の使い方がとても上手ではないかなと思います。影遊びとか、それも非常におもしろい写真があります。

それから、下のほうでは、「わたしの町はっけん」というところで、まちをいろいろと回る。そして、発見したこと、いろいろと集めたことを、メモをするとか、写真で撮るとか、そういうことをして、これらはまちの宝になるようなものだとかみんなで話し合う。その結果をまちの人に伝えたり、発表会をする。そういう、まちの発見というところでも主体的な学習をしているのではないかなと思います。

それから、同じ下で「自分はっけん」ということで、やはり自分のよいところとか、友達のいいところ、あるいは小さかったころの自分とか、自分の発見ブックというのをつくっています。こういうことも成長の一つの過程になるのではないかなと思います。

そういうことで、トータルして、生活のA者を1位といたします。

矢下教育長 続いて、垣内委員お願いをいたします。

垣内委員 この生活科、小学校の低学年を対象に主体的・対話的で深い学習をする、そのための特に基礎をつくるという意味で非常に重要な科目だと思っております。興味・関心を引き出したり、体全体を使った学習、それから、知識・技能だけではなくて、それをどういうふうに使っていくのかということところにも着目しました。

またあわせて、3年生以降のほかの教科、特に社会、それ以外の科目とのつなぎということにも着目をさせていただきました。

結果としては、G者を第1位で、D者を第2位とさせていただきたいと思っております。

いずれの教科書におきまして、大変豊富な生活科カードの事例というのでしょうか、それらが紹介されておりますし、それぞれ後ろのほうに図鑑といいますが、言葉がある「がくしゅうどうぐばこ」であったり、ほかの言葉であったりするわけですがけれども、そういった図鑑集などもついていて、データとしても十分だろうと思えますし、写真やイラストで非常にわかりやすく、さまざまな工夫がなされているわけですがけれども、その中でも、G者の場合は、作品例とか活動事例が非常に豊富で、「かつどうべんりてちょう」というものが巻末について、気持ちの伝え方とか、道具の使い方とか、さまざまなものがここに盛り込まれています。これがまた、中学年、高学年にいったときに、基礎的な知識として役に立っていくのではないかなと思いました。特に、自然系が非常に豊富でわかりやすいかなというふうに思いました。

二つ目は、子供たちが勉強するときに、まず最初に、問いがあってわかりやすい。これは子供たちだけではなくて、指導経験が少ない先生方においても、非常に役に立つのではないかなと思いました。



それから、児童同士の言葉のつながりを矢印で示しているということも、指導者の方がどういった言葉を紡ぎ出しながら学習を進めていくのかというときに、非常に大きな参考になるのではないかと思います。

次に、本当の大きさである「ポケットずかん」というのが巻末についていまして、教科書から外すことができ、外に学習に行くときに一緒に持って行くことができるということも学習する上で非常に大きな工夫ではないかと思います。

そのほかに、作品例などの写真も大きく見やすいということがありまして、ほかの教科書においてもさまざまな工夫がなされているのですが、第1位は、丁寧でわかりやすく、しかも大きくて見やすいと、実用的であるということから低学年の子供たちに持ちやすく、わかりやすいということから第1をG者とさせていただきました。

第2位はD者ですが、D者に関しても非常に豊富な生活科カードの事例もありますし、ポップ・ステップ・ジャンプということで、簡単なイラストで表記されていて、教える方々、教員の先生方にも役に立つのではないかなと思いました。

また、広がる生活辞典というのが教科書についておりまして、これも子供たちの学習を支える上で重要な工夫ではないかと思います。ただ、現実、使うということを考えたときに、やはりG者の工夫のほうが丁寧でわかりやすいということで、第1はG者とさせていただきます。

以上です。

矢下教育長 続いて、高森委員お願いをいたします。

高森委員 小学校低学年の児童を対象とした生活科は、3年次以降の理科・社会科への導入的位置づけにある教科ですが、そこには学校生活を送る上での約束事、対話を通じた人間関係の築き方、学習の視点や態度、体験学習や調べることの楽しさなど、学校で学ぶ全ての教科に通ずる学習を行う教科ではないかと感じました。

教科用図書の選定に当たっては、全体として児童の興味を引く上での工夫が見られるか、体験を通して気づきや発見の質を高める工夫がなされているかなどを中心に比較いたしました。

これらの分析を通して、私は、1位にG者、2位にA者を推薦いたします。

生活科の学習の意義については、2者ともに表4、つまり裏表紙に保護者向けメッセージの欄を設けて明記され、学校と家庭での学習の接続を図ろうとしている点が評価できます。家庭での生活や地域のできごと、社会学習、自然体験など、学校でできないような体験のそのどれもが小学生にとっては新鮮な学びにつながります。家庭と学校の学習の接続が、子供の豊かで多様な学びにつながるという視点は、特に生活科では大切だと思います。

次に、内容について、生活科の学習の第一歩となる上巻の冒頭部分ですけれども、両者ともに、学校という場の意味や学習への姿勢、学校生活を送る上での約束事、集団生活に欠かせない対話や相談の大切さ、登下校時や地域における安全教育など、小学校という新たな環境で安全で充実した生活を送るために必要な事柄を豊富な写真資料や図版を用いて

丁寧に解説しています。特に、通学路や戸外での安全教育については、G者は本編24～26ページの間、あるいは巻末付録の116ページの計4ページにわたって、A者は巻末付録105～109ページの4ページにわたって、それぞれ学習ができるようになっていますが、比較していただければおわかりのように、G者はイラスト中心に身の回りの危険に気づかせる工夫がとられている一方で、A者は文字とイラスト両方で提示する教本スタイルになっていることがわかります。知識を的確に伝えるのがA者、児童に考えさせ気づきを促すのがG者という印象があります。

次に、写真や図版の質と量についてですが、例えば1年生の秋の自然観察の単元を取り上げて比較してみますと、木の実や落ち葉の図版については、A者は上巻の60と64ページに2センチ角の小さな写真、あるいは巻末付録110ページ、111ページに「がくしゅうどうぐばこ」の中で、イラスト図でそれぞれ掲載しています。

一方、G者は、上巻の巻末付録に四季折々の植物をまとめた「ポケットずかん」を収載し、その中に木の実や落ち葉の実物大イラストを使って表現している点で相違が見られます。この点では、実際にイメージをもって学習できるG者のほうが優れていると考えます。

次に製作物についての比較ですが、A者は36～41ページで、例えば夏の工作遊び、66～71ページで秋の落ち葉やどんぐりを使ったおもちゃの製作について掲載されていますが、作り方の説明、つまり設計図に不十分なところがあります。

一方、G者は、50ページ、51ページ「夏の遊び図鑑」、80、81ページの「秋のおもちゃ図鑑」などで作り方の詳細なイラストがあり、またA者と比較するとG者のほうが製作物の種類も豊富で、児童の興味をそそる内容になっているようです。

最後に、巻末の付録を比べて見ますと、G者には上・下巻ともに、学習の決まりごとや進め方をまとめた「かつどうべんりてちょう」が充実しており、また前述のとおり上巻には本編の学習内容に呼応する形の動植物の原寸大図鑑「ポケットずかん」も設けられており、単元学習を補完できる工夫がなされており。

一方、A者は、同じく上・下巻の巻末に「がくしゅうどうぐばこ」が設けられていますが、編集コンセプトに一貫性がなく、G者のように整理されていないといった印象があります。

両者いずれも長所があり、優劣をつけがたいところですが、相対的な均衡が取れているのはG者ではないかと思えます。理科の学習につながる植物の栽培や観察、季節の変化への気づき、また社会科の学習につながる地域の探検や職業体験など、いずれも詰め込み過ぎない適切な分量・内容になっており、また全体的に整然とまとめられた印象があり、大変好感が持てます。よって私は、G者を第1位、A者を第2候補に推薦いたします。

以上です。

矢下教育長 続いて、私でございます。

私は、生活科の教科を子供たちが学校に入って、さまざまな活動を経験して身近な友達ですとか、人々、学校といった社会や、それから地域の自然を通して生活について考える

ということ。そしてそれが、言い換えれば、社会科にもつながっていきますし、地道に子供たちが学校を通して自立していく人にもなっていくと考えています。

そして、生活科の導入としては、教科書としてそれこそ見やすさ、字の大きさ、フォントですとか、色が使いやすくなっているかとか、写真でわかりやすさはどうか、見やすさもしっかりしているかといったこと。それから、経験もさまざま学校でスタートしていくときに、自分のことですとか、学校のこと、それから児童の安全にとって大事な通学路のことが的確に取り上げられているかということを見ていて、さらにその上で、いい点があった2者を選ばせていただきました。

G者を1位に、A者を2位とさせていただきます。G者には、各単元で学ぶ内容の問いが示されているのですが、それがわかりやすく最初に示されていて、児童が考える糸口をつかみやすいと感じました。あるいは、それは指導のしやすさにもつながることかもしれません。巻末には、活動の「べんりちょう」として、気持の伝え方、道具の使い方、安全、観察の仕方などについて詳しく載っかっていて、内容が非常に充実していると感じています。

A者では、1年の生活科の導入は、さまざまな導入だと先ほど申し上げましたが、キャラクターを使って、生活科へ親しみやすく学んでいけるような配慮がされている点がいいと思いました。

また、このA者の教科書は、表紙のインクが、凹凸がはっきりしているような印刷なんですけども、それがあある意味で手ざわりもいいし、楽しく感じるかなという点も私にとってはいいなと思いました。

以上のようなことから、G者を1位、A者を2位とさせていただきます。

続いて、樋口委員お願いをいたします。

樋口委員 もう既に皆さんが説明されたところを省いて、私の選考結果を申し上げたいと思います。選考結果ですけれども、1位をA者、2位をG者にさせていただきました。

そもそも、この生活科の教科書ですけれども、小学校に入学したての子供の学習教科だということをもまず念頭に置いて、この低学年の生徒が社会及び自然の中において、自分がどう生活していったらいいのかというのが学習目標であろうかと思っています。そこにおいて気づき、考え及び自分が行動していくということでありまして、それに対して、どういう教科書が使いやすいのかということにつきまして、教科書の重さ、あとは、挿絵、イラスト等々の観点を見ますと、このように1位がA者、2位がG者になりました。

特にA者ですけれども、言葉を非常に大事にしております、それはあくまで、この学習科目は教室の中で行われるものですから、やっぱり言葉で理解し、なおかつしっかり自分の中に言葉として、いわゆる体の中に入ってくることによって、しっかりした対応行動ができるんだろうと思います。

大きな特徴ですけれども、A者のテキストは、片仮名についても平仮名の振り仮名がついているというところで、小学校1年生において、片仮名、平仮名、両方を学習すること

ができるようになりまして、こういうところで、言葉の充実に重きを置いていることがわかります。

あと、イラスト部分が多い点は、この教科の学習において大きなポイントになるだろうと考えます。あと、ついている図鑑についても充実が図られておりますが、この図鑑については、G者のほうが少し充実しているかなと感じました。

何はともあれ、学習する児童の立場を考え、言葉をまず理解して、それなりのいわゆる学習をするということについての言葉の重さということについての学習については、A者が抜き出るというところでありまして、以上のような理由から、このような順位をつけさせていただきたいと思います。

以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いをします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にG者を挙げた方が3名、A者を挙げた方が2名、2位にA者を挙げた方が2名、D者を挙げた方が1名、G者を挙げた方が2名となっております。

結果として、1位のG者を挙げた方が3名と最も多く過半数を超えております。このことにより、生活については、G者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、生活については、G者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、生活についてはG者に仮決定いたしました。

それでは、G者の発行者名について、指導課長お願いをします。

指導課長 それでは、仮決定のG者についてでございます。発行者名は、東京書籍、図書の名前は、「新しい生活」、以上でございます。

## 音楽

矢下教育長 続いて、音楽についてご審議願います。発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。垣内委員から順にお願いをします。

垣内委員 いずれの教科書もよくできているかと思えますけれども、私は、A者を第1位に推したいと思えます。

音楽を愛好する心情・感性・能力を養い、豊かな情操につなげるというのが音楽の目的ではありますけれども、図画工作、美術、それと音楽といった芸術系の科目を義務教育で

教えている国というのはそんなに多くないわけですが、これは情操教育の大きな基礎となるだけではなくて、自由な発想、考え方、そして想像力を養うという意味でも音楽は大変重要な科目であろうかと思えます。

いずれの教科書も、表現、鑑賞といった領域は網羅され、また、日本の音楽と世界の音楽がどちらも取り上げられておりますし、目次には、教科ごとの学習内容が書かれているということで学習の見通しも持ちやすい。そういった共通点がございます。写真やイラストも多く用いられていますし、日本の歌や祭りで使われる伝統的な楽器、そういったものについても十分目配りされて網羅されているという共通点はあるわけですが、私がA者のほうがよいと思う理由ですが、二つあります。

一つは、例えば、オーケストラの編成とかが楽譜、それからそれぞれの音色やリズムなどの音階などに、基礎的な事柄が割ときちんと網羅されているという点を評価いたしました。音楽はグローバルな、要するに国境を越えたコミュニケーションツールでもありますので、そういった基礎・基本がきちんと身につくということも重要なことではないかと思いました。

二つ目は、どちらもやっていらっしゃるのですが、A者の場合、育てようというリズム学習の基本づくりについて比較的詳しくご説明があります。もちろん表現に関してもA者の鑑賞が89で、B者のほうが鑑賞が71ということで、少し、A者のほうが鑑賞することに重きを置いているという部分はあるんですけども、先人が残したすぐれた楽曲をしっかりと理解して踏まえた上で、新しく自分たちの音楽をつくり上げていくというオーソドックスな手法ではないかと思いましたので、A者が第1位、第2位なしとお願いしたいと思えます。

矢下教育長 続いて、高森委員お願いをいたします。

高森委員 音楽科に関しては、まず、他教科同様に、音楽を学ぶ意義・目的が明記されているか、あるいは学習内容が概観できるコンテンツがあるかについて確認しました。次いで、音楽の分析、楽器の奏法、指揮法、楽譜記号の解説などの充実度、使用された楽曲・曲目のジャンル別のバランスなども考慮しました。

これらの分析を通して、私は、1位をB者、2位をA者といたします。

音楽を学習する意義・目的については、両者とも明記はありませんが、B者は表紙周りでいきますと、表4、つまり裏表紙に、当該学年の教科書がどのようなコンセプトのもとで作成されたかが簡潔に説明されています。また、B者には、各学年冒頭4、5ページの見開きに、年間を通した学習内容を概観できるページが設けられており、見通しを立てることが可能になっています。

振り返り・まとめにつきましては、A者は各学年の巻末に「『音楽のもと』まとめ」というページがありますが、実際には1年間を通した学習のまとめには必ずしもなっていないようです。一方のB者には、各学年の巻末に1年間の学習の「ふりかえり」が掲載され、こちらが学習内容を集約したまとめの機能もしっかりと有しています。さらに、4年生以

降に共通してB者の巻末には、リコーダーの運指表、楽譜記号の一覧、和音・音階の説明などもまとめられており、わからないことがあればすぐにアクセスでき、利便性が高まっています。

次に、楽器の演奏法についてです。小学生が音楽活動で頻繁に使用する鍵盤ハーモニカとリコーダーに焦点を当てて比較してみました。鍵盤ハーモニカでは、A者は1年生の34～39ページに見開きで、2年生も20・21ページ、24・25ページに見開きで。一方のB者は、1年生の34～39ページに見開きで、それぞれ同じような紙面構成で説明がなされていますが、A者・B者ともにほぼ実物大の鍵盤の画像を利用するなど直感的に理解できるつくりになっていると思います。

一方のリコーダーについては、A者は3年生の18～23ページ及び52・53ページ、B者は3年生の20～27ページ及び52・53ページと、B者のほうが情報量が多くなっております。また、見落としがちな部分で、B者では3年生の21ページにおいて、使用後のリコーダーを清潔に保管する方法についても解説されています。

次に、楽曲の選曲バリエーションについてです。2者とも童謡、民謡、唱歌、交響曲、歌謡曲など幅広いジャンルから選曲がなされ、それぞれの学習の目当てに応じて配当されていることが理解できます。ただし、大きな違いは、目次を比較するとわかります。例えば、6年生の目次を比較しますと、A者は「短調のひびき」、「演奏のみりょく」、「ひびき合いを生かして」、「ききどころを見つけて」、「豊かな表現を求めて」などといった抽象的・観念的表現で具体性に欠けるのに対して、B者は「歌声をひびかせて心をつなげよう」、「いろいろな音色を感じ取ろう」、「旋律の特徴を生かして表現しよう」、「曲想の変化を感じ取ろう」、「詩と音楽の関わりを味わおう」などのように、実に具体的に目当てが示されており、意識的に楽曲に向き合う姿勢を重視している点が、高く評価できると思います。

なお、楽曲の傾向としては、A者はスタンダードな曲目が多く、一方、B者は新旧取り混ぜた編成になっている印象があります。例えばA者・B者ともに5・6年生では、それぞれ卒業式に合唱したり演奏したりする楽曲が意図的に用意されているのですが、この点もB者のほうが小学校高学年にもなじみのある比較的新しい曲目が多く含まれているようです。児童たちが、教科書を通覧したときに、作品に触れてみたい、感じてみたい、あるいは仲間と一緒に歌ってみたい、演奏してみたいというような興味・関心をかき立てる曲目が多く含まれていることは、学ぶ意欲におのずと直結するのではないかと思います。

以上の分析から、私は、B者を1位、A者を2位に推薦いたします。

以上です。

矢下教育長 次に、私から申し上げます。

音楽という科目は、人にとって、人間にとって情操を育てていくために極めて大事で、それでこの科目は全体の大事な基礎の一つであると考えております。音楽自体を鑑賞していくこと、歌うこと、演奏すること、演奏することはさらには、楽器への関心を高めると

いう、そういった点から教科書を見ていくと、2者ともに満遍なく今申し上げた教材が取り上げられております。

例えば、演奏という面では、楽器関連の関心を高めるという点では、例えば鍵盤ハーモニカやリコーダーが多く掲載されていて、実際に指使いを確かめるといったことから始める、経験を進められるようになっていて、両者ともに工夫がなされていると感じたのが率直なところです。

両者とも伝統的な和楽器や和の音楽について紹介がされていて、我が国や郷土、伝統や文化を理解するための教材も、全学年に掲載をされているのですが、例えば6年生では、A者が雅楽、B者が歌舞伎を取り上げているのですが、取り上げる内容の展開を見ていくとB者がより和を強調している面があるなと感じたところです。

今、日常生活では、アジアを含めて外国の音楽の影響が強い中で、子供のときに将来に向けた大事なときに、和の音楽、和に関する伝統についてもきちんと学んでおくのはいいのかなということで、私は、1位にB者、A者を2位とさせていただいております。

続いて、樋口委員お願いをいたします。

樋口委員 この2者ですが、B者は主体的・対話学習が可能ないように、ある曲の音符の横にしっかりどうやって演奏するか説明が詳しく書かれている、その一方で、A者のほうは、音符の隣にはその音楽の背景となる写真があるというだけの話でありまして、対話型の学習については、A者の教科書のほうがすぐれていると考えられます。

さらにもう既に言われているところですがけれども、各章の冒頭に学習内容が明記されておりまして、最後には振り返り項目があって、それぞれの曲ないしは演奏内容についての題材について、目標や活動についての狙いとか、その狙いについてもしっかり明記されているのが見定められます。

以上を勘案しまして、1位B者のみ推薦をしたいと思います。

以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員お願いをいたします。

末廣委員 私は音楽は、B者を1位といたしました。したがってA者は2位なわけですが、まず、A者のほうからちょっと申し上げます。私なりに感じたのは、例えば変奏曲の説明というのは、ほかの教科書にはあまりないのではないかと、あるいは、ジャズとクラシック音楽の出会い、ガーシュインを扱っていますけれども、こういうのもほかには見られない。編集の方針として割とユニークな面があるのではないかと思います。

それから、和ということであれば、日本の楽器とか、あるいは雅楽、あるいは滝廉太郎の歌とか、そういうものも入っていますので、和というものを意識した編集をされていると思います。

それからB者のほうですが、各学年の目次というのですか、1、2年もそうなんですけども、例えば3年、4年で見ていくと、順番はちょっと変わっているところもありますが、同じようなタイトルとありますが、テーマとありますが、それが1年・2年、それから3年・4

年、5年・6年とありますがそれぞれの学年グループでテーマが統一されています。例えば3年でいきますと、一番最初に「音楽で心をつなげよう」。4年は「音楽で心の輪をひろげよう」。それから、2番目は、4年は「歌のひびきを感じ取ろう」、3年は、「リコーダーのひびきをかんじとろう」等々、ほとんど同じパターンのタイトルが出てきています。それは、5年・6年でもほとんど同じです。5年生のときに「歌声をひびかせて心をつなげよう」、6年では全く同じタイトルです。それから3番目の「いろいろな音色を感じ取ろう」というのが6年では2番目に出てきて「いろいろな音色を感じ取ろう」となっております。5年・6年でも「和音の移り変わりを感じ取ろう」「いろいろな和音のひびきを感じ取ろう」、「曲想の変化を感じ取ろう」とあり、教えるほうも、教わるほうも非常にわかりやすいタイトルですね、各学年ともそううたっております。

それから、あと、特徴的に見られるというのは、弦楽器なんかは、オーケストラの説明、あるいは連弾合奏で音の重なりを感じ取るとか。リズムアンサンブル、打楽器だけの演奏とか、それから和音の移りわりを感じながら演奏、あるいは合唱をしましょうとか、詩と音楽の関わり、これは日本の歌曲の話になっています。そういうことで、子供たちがより興味を持って音楽を理解し、楽しむような説明になっています。あとは音楽の歴史をつくった人が出てきますが、山田耕筰、北原白秋、宮城道雄、ショスタコーヴィチとこういう人たちが出てきております。また滝廉太郎とかあるいは歌舞伎の話とか、いろいろとありますけれども、とにかくみんな音楽を楽しむというパターンですね。そういうことで、音楽はB者を1位としました。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にB者を挙げられた方が4名、A者を挙げられた方が1名です。2位にA者を挙げられた方が3名となっております。

結果として、1位にB者を挙げた方が4名となり最も多く過半数を超えております。このことにより、音楽についてB者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、音楽については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、音楽についてはB者に仮決定をいたしました。それでは、B者の発行者名について、指導課長お願いします。

指導課長 それでは、仮決定のB者についてでございます。発行者名は、教育芸術社、図書の名前は、「小学生の音楽」、以上でございます。



## 図画工作

矢下教育長 続いて、図画工作についてご審議願います。発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。高森委員から順にお願いします。

高森委員 図画工作科については、教科の特性上、学習の意義・目的について、どのように提示されているかが興味深いところで、この部分は価値観が固定化する説明になっていないか注意して比較いたしました。

また、各單元ごとに学習活動の目当てや見通しがしっかりと示されているか、既習事項が活かされた題材や活動内容が見られるか、図画工作科の教科書ならではの資料の視覚的効果・ビジュアル的要素が充実しているか、材料・用具の使い方の説明は適切かについても重視しました。これらの分析を通して、私は、1位をB者、2位をA者といたしました。

図画工作を学習する意義・目的に関しては、A者は、1年から4年生までは「たのしいな、おもしろいな」「ためしたよ、見つけたよ」において感覚的な気づきにつなげる説明文が、5・6年生では「見つめて・広げて」において理念的に考えさせる説明文が、それぞれ設けられています。一方、B者は、全学年全ての教科書見返しに「図画工作を学ぶみなさんへ」が設けられていますが、こちらの説明文の内容はいずれも理念的ではなく、価値観を押しつけることを避けつつ、児童の発見・気づきを促すような説明文になっており、図画工作科という教科の特性にふさわしい工夫がなされています。

目当て・見通しに関しては、A者・B者ともに、各単元の冒頭に学習の目当てとしてしっかりと示されているものの、振り返りはA者にはありません。その点において、B者は各ページの下欄の随所に振り返りが提示されていることも、美術系の教科書としては珍しく、教える側の立場に立っても使いやすい部分ではないかと思えます。

図版や写真の活用については、両者ともさほど差異は見られず、どちらも学習者の感性・ひらめき・美意識・想像力を刺激する内容になっておりましたが、B者がすぐれていると思われる点は、2次元コードを活用し、教科書に収載できなかった教材を補完する工夫がなされている点だと思えます。

材料・用具の使い方の説明については、A者は「使ってみよう材料と道具」の項目をたて、B者は「学びの資料」として、それぞれ巻末にまとめられています。絵の具・かなづち・のこぎり・はさみ・接着剤・彫刻刀など、使い方ばかりでなく、使用上の注意点や後片づけの仕方も併記するのは当然のこと、それぞれの道具や材料を使って、どのような表現が得られるかについても、簡単に説明されています。ただし、A者とB者の相違点として、例えばA者は、金づちの取り扱い説明は3・4年の上巻のみ、のこぎりは3・4年の下巻のみで、かなづち・のこぎりは5・6年でも引き続き活動があるにも関わらず再掲されていない。一方で、B者は3・4年の上巻に金づち・のこぎりの取り扱い説明、3・4年下巻にも金づち・のこぎりの取り扱い説明、5・6年下巻では金づちと電動のこぎりの取り扱い説明

といったように、学年をまたいで既習事項を再確認できる内容になっている点は高く評価すべきだと思います。

以上の考察から、私は、B者を1位、A者を2位といたしました。

以上です。

矢下教育長 私のほうは、推薦するほうをB者とさせていただきました。学習の仕方、考え方、その流れということでは、各学習の単元の目当てについて教科書のはじめ、さらには各単元のはじめにわかりやすく載せております。わかりやすく目当てを提示することが自由な発想や創造性に枠をはめるようなことになるのではないかとということも考えられる訳ですが、大胆に考えて物事をつくり出す、あるいは行動できる子供、児童だという一方で、新しく試みるということのスタートにつまずく児童がいることを考えると、少し丁寧な学習の目当てがあっても、まずはつくるですとか、描くですとか、そういった経験を積むことが大事と考えてB者としました。

さらには、何かをつくる、活動するといったときの過程の説明の仕方では、例えばB者の6年生に、スチレンボード版画の制作過程がありますが、写真等を使って細かく、わかりやすく、進めやすくしてある、そういった点も良しといたしました。そういうことで私はB者を推薦させていただきます。

矢下教育長 続いて、樋口委員お願いいたします。

樋口委員 2者の中からの選択ですけれども、教科用図書調査委員会の報告によれば、B者の教科書は全学年57ページに対して、A者は全学年67ページと10ページの差があると。総量の57ページなんですけれども、これに対して同委員会は、適度な情報量であると評価づけておまして、ならば学年に割り当てられた最小限の授業時間割り当ての中で、情報量が適量であるのならば、やっぱり年間の授業計画を立てやすい教科書がいいのではないかと、こう思います。したがってB者を第1位にしたいと考えます。

これも既に言われているところですが、各単元において重点項目がしっかりしておりまして、学びの資料が項目として立てられております。また、作業の模範も明確に示されておりまして、児童が各作業において、この模範どおりにすることによって図画工作の実践面を体験することができるというところであります。

以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員お願いをいたします。

末廣委員 私はB者を1位といたします。B者では、やはり学習の取り組みとしては、まず個人で学習を深める。それからその後、共同で取り組む活動。その上で、友達との話し合いの場面をつくるということで、いわゆるコミュニケーションを図りながら、活動することが目的とされているということで、それはその結果、発想とか、構想力、それを伸ばすことになるのではないかとこの考えです。

それから、教科によってですけども、この場合も非常に安全指導というのが必要になってくるということで、その点も充実していると思います。それから、学習の目当てがアン

ダーラインで明確に引かれているということでわかりやすい。それから、他教科との関連、それも学習しているということで、それから、振り返りとしては、教師から質問を投げかけているという形です。それから、全体的に大きい写真が多い。そのため非常にインパクトがあるということです。それから、特に印象に残ったところでは、5年、6年の下、鑑賞のところを龍を見るということをして4ページにわたって非常に迫力のある写真が用いられております。そしてまた、鑑賞のところを二つの作品を見比べてみる。その作品のよさ、あるいはその違いです。同じようなテーマでの二つの作品ということです。そういうのもあります。

そういうことで、B者を1位といたします。

矢下教育長 続いて、垣内委員お願いをいたします。

垣内委員 図画工作は、自由な発想ができるような工夫とともにいろいろな作品の紹介ということが重要ではないかと思っておりますので、その点も加味して判断いたしまして、B者を第1位とさせていただきたいと思っております。

各單元ごとに、育てたい資質・能力に関する学習の目当てというものは両方とも示されておりますし、それぞれの題材というのも情報量も非常に豊かに盛り込まれていると思っております。

ただ、一方でいただいております教科用図書調査研究委員会からの報告書によると、A者のほうはかなり情報量が多過ぎて、実際見てみると、1枚、1枚の図とか写真も小さく、文字も非常に小さい。たくさんの情報量という意味ではいいのですけども、やはり勉強する子供たち、学ぶ子供たち、それから教える先生方にとっても、あまりにも情報量が多いと、その中でどこまで教えていけるのかという現実の問題に突き当たるのではないかと思います。

また、B者のほうは、過不足なく題材を盛り込んでおりますけれども、あわせて2次元コードをつけておりまして、ほかの作品も見られるということで、そこで補填をしている点も良いと思っております。

B者につきましては、ほかの委員の先生もおっしゃっていましたように、一応、重点を赤字で示した、その学習の目当てというものを示されておりまして、これ自体は何をどういうふうにしようと、何かを考えようとか、つくろうとかそういうものですので、特に価値観を押しつけるということもないのではないかと判断いたしまして、この点も教える側の立場に立った工夫ではないかとポジティブに評価させていただきました。

以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にB者を挙げられた方が5名、2位にA者を挙げられた方が1名となっております。

結果として、1位にB者を挙げた方の数が5名と最も多く過半数を超えております。このことにより、図画工作については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、図画工作については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、図画工作についてはB者に仮決定いたしました。それでは、B者の発行者名について、指導課長お願いします。

指導課長 それでは、仮決定のB者についてでございます。発行者名は、開隆堂出版、図書名は「図画工作」、以上でございます。

## 家庭

矢下教育長 続いて、家庭についてご審議願います。発行者は2名となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。私から順に発言をいたします。

家庭ですが、どちらも学習の進め方として、課題発見、その課題解決、実践活動、そして改善評価というサイクルを同じように示しております。A者のほうが各単元でより明確にその過程を示しております。

これらの形は他の教科や日常生活でも使える通常のサイクルを示しておりますので、この点ではA者。背景や大きさなどが違うので比較が難しいのですが、写真等が効果的で使いやすい見やすいという点でもA者と考えています。したがって、A者を私は推薦をさせていただきます。

続いて、樋口委員お願いをいたします。

樋口委員 これは子供たちが生活をしていく中において、もしご両親がお仕事で忙しい場合には、両親に変わってある作業をしなきゃいけない技術の問題であります。料理にしても、ミシンがけにしても、同様であります。これにつきまして、教える側の立場として、ぜひ教えた教科書を使うほうが望ましい訳でして、そこにおいて、教科用図書調査研究委員会の報告によれば、私も確認しているのですが、ゆで卵のゆで方に関して、B者は10分から12分茹でるとある。参考に卵などの賞味期限についての記載もあるが、10分以上ゆでる根拠は形成されていない。こういう項は、説明に関して非常に不明確な部分がある一方で、A者のほうは、しっかり3分、5分、10分、15分のゆで方において、卵の内容がちゃんと明確化されているという、この辺が個々の児童が家庭において、ゆで卵を自分でつくるときには、こういう時間経過においてどういうことになるかということを学習する。こと幸いにおいて、A者のテキストのほうが、いわゆるわかりやすく、なおかつ自分で体験をして、実践しやすいような教科書の内容になっているというところであります。

さらに、巻末に「確かめよう」というところがあり、なおかつ、家庭生活及び消費生活環境のバランスがうまくとっております。教科書のボリュームとしては、ページ数としては、約8ページぐらいでA者のほうが多いんですけども、内容の正確さにつきましては、A者のほうがB者より優れているというところでありまして、1位としてA者を推薦させていただきたいと思っております。

以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員お願いいたします。

末廣委員 私は、A者でございます。この導入の仕方が非常にA者のほうは上手と思えます。「私の生活大発見」の中でステップ1、ステップ2、これは話し合おう、そして計画して実践しようということですが、それで、実際の活動で調べようとか、調理方法はどのようながあるということですが、最初にお茶を入れてみようというのが出てきます。このときに、調理に必要なガスコンロの使い方とか、それから、具体的に点火する。炎を調整するとか消火するとか、そういう前段階があって、その後、お茶を入れる。その材料、それから必要な量を量ったり、そしてお茶を入れる。最後に片づけるということで、その一連の流れですね。なおかつ、お茶の種類とのお茶に適したお湯の温度とか、そういうのをプロに聞くとか、新茶摘み体験等を通してそういうのを覚えていくということですので、今、一般的に大人の方もちゃんとしたお茶の入れ方を知らない方が結構いらっしゃるんですよ。こういう小学生のときからお茶をどうやったらおいしく入れることができるかというテーマは、非常にユニークで感心しました。

それから、調理の問題ですが、安全に気をつけなくてはいけない場面がいっぱいあるわけですね。それをチェックしてあって、安全に気をつけるべきところは安全というマークが出てきています。調理で野菜を茹でるといって、これも初めにしては難しいと思えますけれども、その中でちゃんとしたおいしいおひたしをつくるにはどうしたらいいかというのを考えよう、調べよう、やってみようという、そういう順序でしっかり動くことができるように、その間の調理の過程というのも写真を多用して、非常にわかりやすい掲示をしております。

そういうことで、家庭科をやるには丁寧な指導が必要だと思えました。それから、この章の終わりでは、食べるときのマナー、姿勢とか、あるいはいただきます、ごちそうさまでしたという話までもここに書いてあります。そういうことで、非常に丁寧な家庭科の指導のあり方ではないかと思っておりますので、家庭はA者にいたします。

矢下教育長 続いて、垣内委員お願いいたします。

垣内委員 家庭科の場合は、実践的・体験的な活動を通じて家族や家庭、消費活動、それから環境社会といったようなものを科学的に理解する、そういうのを身につけるということが目的であろうと思っております。その観点から両者比較いたしまして、私もA者が第1位とさせていただきたいと思っております。

A者、B者いずれも家庭科を学ぶ、その導入部分で、何を目的としているのか、そしてど

うという形で学んでいくのかといったようなプロセス、進め方についても、十分にイントロダクションの導入部分も置いておりますし、さまざまな場面で写真とかイラストを十分に使ってわかりやすく理解できるような工夫もされていると思います。

また、あわせて専門家の考え方といったものも随所に取り入れながら、幅広い学習展開ができるような形になっているわけですが、A者のほうが、よりイントロダクションの部分といいましょうか、丁寧な説明とわかりやすい導入部分が用意されているように感じました。特に、例えば、A者の38ページの1、持続可能な社会ということで、買い物とか、自分の消費活動などについて、非常にバランスよく消費者目線での考え方が示されており、こういった単に技術・技能だけではなくて、その習得した知識や考え方というものを社会で生きる上で、どういうふうに社会に影響があり、そしてそれをまた、どういうふうに自分たちの行動につなげていくのかという生活全般について考えさせる部分という意味で、非常によくできた構成になっていると思います。これは、一例ですが、それ以外のところも非常に説明が丁寧でわかりやすい。また、大きな写真も理解を促す上で、効果的であろうと思いましたので、A者を第1位、第2位なしということで選んでいます。

矢下教育長 続いて、高森委員お願いいたします。

高森委員 人間が生きていく上で最も大切な基盤・土台となるものが、衣食住や健康であるとするならば、家庭科や保健科、小学校の場合は体育科ということになるのでしょうか。これらの教科を学習する意義は、大変大きいものであると考えます。そこで学ぶ知識や経験というのは、学習者の生涯にわたって活かされるものであるからです。

本教科の比較・検討では、家庭科を学ぶ意義や各単元の動機づけが明示されているか、日常生活に直結しているか、道具の使い方や実習の手順などが合理的に説明されているか、安全面への配慮がなされているか、視覚から入る写真・図版の活用が適切かどうか、などに着眼しました。

こうした分析を通して、私は、1位をA者、2位をB者と考えました。

家庭科を学ぶ意義や学習の進め方については、2者とも折り込み6ページにわたって説明がなされていますが、B者は写真を多用するなど視覚的效果を重視し、一方のA者は文字情報を多く活用して確実にメッセージを伝えようとする工夫がなされています。

次に環境面・安全面への配慮について。家庭科の実習では、調理器具・裁縫用具・火気の取り扱いなども必然的に多くなります。調理や裁縫の技量以上に、使用する用具の利便性と危険性、使用法並びに使用上の注意点などを学ぶことは最優先事項でしょう。これらの記述は、授業を安全かつ円滑に進めていく上でも欠かせません。その点に着眼したとき、A者は巻頭の8・9ページ並びに巻末に、B者は巻頭の6・7ページに、それぞれ全体を通して実習の安全を確保するよう十分な説明がなされており、また、各単元において、例えばA者の10・11ページとB者の12・13ページとを比較してみればわかりますように、環境・安全それぞれのアイコンを有効に活用して、注意喚起が的確かつ充実しているのはA者で

はないかと思えます。

学びを家庭に持ち帰って再現できるかについて2者を比較した場合、例えばA者は31ページに「生活を変えるチャンス」、B者は75ページに「家庭で実践しよう、チャレンジコーナー」といったコーナーを設けて、2者とも意図的に家庭学習を促す工夫がなされています。

最後に、紙面の使い方や大きさについて、A者・B者を比較いたしますと、調理や裁縫など一連の工程を説明する際には、やはり見開き両面にわたって提示がされているというのは非常にいいことだと思えます。この点に関しては両者に差異は感じられません。ただし、一点気にかかるのは、児童のワーキングスペースに当たる机の上の大きさを考慮した場合に、教科書を開きながら、実際の実習の作業をする場合には、A者は見開きA3サイズの占有率、B者は見開きB4サイズの占有率となっており、B者のほうが机を広く利用できるという利点があるようには感じます。ただし、この点は、実物投影機や電子黒板などを活用したり、教科書を机の下にしまうなどして実習に臨む工夫をすることで、問題はクリアされるのではないかと考えられます。

以上の分析を通じて、私はA者が1位、B者が2位と考えます。

以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げられた方が5名、2位にB者を挙げられた方が1名となっております。

結果として、1位にA者を挙げた方の数が5名と最も多く過半数を超えております。このことにより、家庭については、A者に仮決定させていただきたいと思えますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

樋口委員 お願いをしておきたいのですが、おいしく作って、おいしく食べるというところについて、おいしく食べるというところがちょっと軽視されているのかなと感じました。特に、調理器具と食器について、特に食器についてですが、本区は、かっぱ橋道具街という、世界に誇る食器の商い通りがあるわけですし、これを使わない手はなくて、ここに出ているものをいただくときには、どういう食器がいいのか、パンをいただくときにはどういう食器がいいのかと、これを含めた教育をぜひこれは地元の優位性を生かす意味で、なおかつ、もし場合によっては、将来の後継者もそこから出てくることも考えられますし、将来、かっぱ橋道具街で商っていく食器を使ってみずからのビジネス展開もあり得るところなので、ぜひとも、地元のかっぱ橋道具街の食器の豊かさを子供たちに教えていきたいというのが要望です。

以上です。

指導課長 委員のご意見につきましては、理解させていただきました。ただ、家庭の目

標また内容に関しまして、調理の計画を立てることができるであるとか、食器を安全に衛生に気をつけて取り扱うであるとか、材料に応じた調理の仕方等がありますので、なかなかかっぱ橋道具街の調理器具についてとか、あるいは盛りつけ方、おいしくいただくというところには、家庭の時間内だけではできないところではございますが、広く捉えて、食育の時間ということ、それから、社会科を交えた地域見学なども踏まえまして、そういう地元の名物なども使って、そしておいしくいただくところには、持っていきたいと思っておりますので、ご理解いただければと思います。

矢下教育長 よろしいでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、家庭については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、家庭についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、指導課長お願いします。

指導課長 それでは、仮決定のA者についてでございます。発行者名は、東京書籍、図書の名前は「新しい家庭」、以上でございます。

矢下教育長 それでは、ここで少し休憩といたします。午後3時ちょうどに再開をいたします。

(休憩・14:45～15:00)

## 保健

矢下教育長 それでは、審議を再開させていただきます。

続いて、保健についてご審議願います。発行者は5者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。樋口委員から順にお願いをします。

樋口委員 5者とも、生活、育ちゆく体と私、心の健康、けがの予防、病気の予防について、大体同じようなページを割いておりまして、この辺は甲乙つけがたいところがございます。わかりやすいというところ言えば、D者とE者かなと、こう思います。

特に、この科目は女兒及び男児の体の変化についての説明、教育をしなきゃいけないところがございます。これにつきまして、いらぬ油断ないしは誇大妄想を与えてはいけませんので、これをどう教科書に反映させて子供に教育していくかということについては、非常に重要なポイントであり、ここは選定において特に重視をしなきゃいけないと私は考えます。

つきましては、D者ですけれども、体の変化について影絵で体の変化を説明しているところにおいては、特にすぐれているなというところがございますので、D者を1位、E者を2位



というところにさせていただきたい。

特に、具体的に各章における学び合う活動の項目を設けて、友達と教え合う、学び合うところについては、マークでもって説明がなされておるところでは、非常にわかりやすく、なおかつ児童が勉強しやすくなっているというところでございます。

その他、ありますけれども、何はともあれ影絵でいわゆる体の変化を説明しているところにおいては、他にない優位性をもっているというところでD者を薦めていきたいと思えます。

以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員お願いをいたします。

末廣委員 私は、体育・保健は、E者が2位、D者が1位にいたしました。

やはり特に、5年、6年あたりの保健というのは、ちょうど子供たちの体が変わってくるそういうときですので、体とともに心の健康ですね、これをやはりより強調して、勉強すべきだと思えます。

D者も、E者もこれに関しては、非常に多くのページを費やして扱っております。特に、D者に関しましては、コーナーとそれから「心ってどこにあるの」そういう問題まで、もっと知りたい、調べたいというところまで出てきて、あと、心と体のつながり、あるいは、不安や悩みへの対応とか、そういう細かいところまでも触れて、子供たちのちょうど、いわゆる思春期になるときの体のあり方、心のあり方ということ的背景に非常に細かく、教科書でも取り扱っております。

それから、いわゆる扱い方としては、今までと同じように主体的に、アクティブにやっていく、ラーニングをすることによってつかむ、あるいは考える・調べる、まとめる・深める。そして、それぞれの単元のページのそれぞれのところの一番下の段に、正しい説明が、あるいは情報が書いてある。そういうことで、これは先生にとっても生徒にとっても児童にとっても、便利ではないかと思えます。そして、もっと調べたい、あるいは知りたいということで振り返りからまたどんどん深めていくという、そして次につなげるという。そういうあり方が構築されております。

E者もいいところはあるのですが、特にE者の場合は、各章の終わりに学習を振り返るということで出てきております。しかし比較すれば、保健はDが1位ということでございます。

矢下教育長 続いて、垣内委員お願いいたします。

垣内委員 保健は、ほかの委員の先生方もおっしゃいましたように、心身ともに健康であるということが全ての基礎になるわけですから、大変重要な科目であろうと思えます。また、思春期という発達段階にあるということも十分理解して、健やかな生活をしていく上で基礎となる情報、知識、そしてそれをいかに生活の中に取り込んでいくかということが重要かと思えます。いずれの教科書も、情報量、それから学習のプロセスなど十分に盛り込まれているわけですが、私はB者を第1位でD者を第2位に推薦したいと思えます。いずれの教科書も日常化を図るための工夫がありますし、学習の流れ、あるいはまとめと

いったようなこともきちんと編集されていますし、領域別のページ数の割合を見てもほぼ同じで、情報量としては十分にいずれの教科書も満たしているかと思えますけれども、E者の場合はさらにその各章ごとに動機づけのページというのがありまして、非常にイメージしやすい課題を記載しております。

思春期の体の変化につきましては、ほかの先生方もおっしゃったかと思えますけれども、ここでは着衣した全身の絵を使っていて、また、心の健康に関しては相談相手を具体的に示す、また、相談の受け方についても示しております。あと、学習の流れに関しても、振り返ってみよう、話し合ってみよう、考えてみよう、調べてみよう、やってみようというようなことで、「新しい自分にレベルアップ」といったようなつながりがわかるような構成になっているということも高く評価いたしました。また、大切な言葉が太字になっているというところのメッセージ性もあります。

あと2点、特にほかの教科書よりもいいかなと思いましたが事例としては、例えばE者の場合は、手の清潔に関して、写真で細菌のコロニーがどうやって増えていくのかというのを時間別で示して、よりインパクトのある情報提供をやっていると同時に、写真で爪など細かいところも含めて手の洗い方を具体的に示している。それはこの手の清潔だけではなく、そのほかのところに関して非常に具体的に明確に示されているのかなという点がよろしいかなと思いました。

2点目は、これは保健ということでそれぞれ個人の心身の健康を扱う科目ではあるんですけども、例えば災害に関して、E者では自助・共助・公助という形で2ページを使って社会とのつながりみたいのところまで触れている。最後の巻末のページでは地域の保健活動ということで、社会とのつながりの中で自分たちの健康をどういうふうに維持するのかということまで示されておりまして、その辺、評価をさせていただきました。

2位のD者に関しましても、非常にイントロが丁寧でわかりやすくバランスよく情報が盛り込まれていて、学習の流れを「つかむ・考える・調べる・まとめる・深める」といったような構成になっておりますし、章の最後には「振り返り・深める・つなげる」といったようなことで非常に系統だった学習ができるようにはなっているわけですけども、よりその社会全体の広がりに着目したという点で、B者を第1位、D者を第2位とさせていただきたいと思えます。

矢下教育長 続いて、高森委員、お願いをいたします。

高森委員 小学校で学ぶ教科の中で、家庭科と並び人間が生きていく上で最も必要な知識と言えるのが保健科になるのでしょうか。健康は全ての学びの基礎である、これは先ほど垣内委員がおっしゃったとおりですけども、それだけではなくて、また、学校生活と日常生活が直結するわけですから、学校での健全な教育環境を保つ上でもこの科目はとても意義があるし、あるいは家庭における児童の健康管理や生活習慣、これは意識すべき事柄であると言っても過言ではないと思えます。

したがって、教科用図書の選定に当たっては、保健での学びの目的・意義がどのように

記されているかを見るばかりでなくて、全ての単元において常に日常生活に照らし合わせて考えさせる内容になっているかどうか主眼を置いて比較いたしました。同時に、個別的内容としては、特に思春期・いじめなど心の成長と葛藤の記述は、小学生から中学生がまさに該当する年代、世代となるので、今まさに学ぶべき項目として重視し、あわせて事故・防犯・防災などのリスク教育、医療・薬品による病、病気の治療法などの基礎的な知識を効率よく学習できる構成になっているかを確認いたしました。これらの分析を通して、私は、1位にE者、2位にD者を推薦いたします。

保健科での学びの目的・意義については、両者とも大単元並びに小単元のそれぞれの冒頭に明記されており、学習の目当てがはっきりとわかるように工夫されております。ただし、学習の進め方については2者では相違が見られ、D者は、「つかむ・考える・調べる・まとめる・深める」の活動が恐らく見開き2ページでおさまるようという意図的編集のもと構成されているようですが、見開き編集を意識するばかりに学習内容が圧縮され過ぎていて情報量の少ない傾向が見られます。

これに対してE者は、「気づく・見つける・調べる・解決する・深める・伝える・まとめる・生かす」の学習課題が4ページにわたって組まれています。ゆったりと学習課題を消化していく工夫がなされており、ゆとりのある紙面の中に見やすく豊富な情報が盛り込まれている点に好感を持てます。具体例を挙げれば、歯の健康・口腔衛生を取り上げたE者の5・6年の60・61ページ、D者の5・6年の42・43ページ、これだけを比較してもE者が秀逸なことがわかります。

思春期特有の悩みや不安に対する単元学習では、D者・E者ともに5・6年生において、あらゆる悩みや不安に対応できるようなストレスの解消法や相談の仕方などについて多くの紙面を割いてアドバイスがなされています。一方、D者は、いじめに特化したページが設けられているのが特徴です。両者ともに多感な時代を過ごす子供たちにメッセージが届く内容になっており、課題意識をもって編集されていると思います。

リスク教育の部分では、例えば5・6年生で交通事故を扱ったD者の22ページ以降、E者の29ページ以降を比較いたしますと、D者は自動車教習所の教本のような構成で無駄のない的確な記述になっている一方で、E者はより実際に即した具体的内容で考えさせる構成になっており、小学生にはE者のほうがなじみやすいのではないかと思います。また、事故・犯罪被害・災害時・緊急時の安全確保については、D者・E者ともに3・4年巻末をご覧くださいとわかりますように、3・4年生の段階から早々と学習させる点は高く評価できます。

特に目を引いたのは、5・6年のE者37ページに1ページを割いて安全マップづくりが解説されている点で、この部分はD者では5・6年の27ページにおいて紙面の3分の1に軽く触れられる程度、他者でも同じように軽く触れられる程度にとどまるなど、安全マップづくりの教育的効果を過小評価している点が少し残念だと思いました。安全マップづくりは、単に地域の安全面での課題を認識するためだけにあるものではありません。児童たちがマッ

プづくりの作業に取り組む過程で、普段の授業では発言量の少ない児童や勉強が苦手な児童も積極的に作業に加わることができる、あるいはいじめや不登校の解消にもつながったという実践例があるなど、単元学習以外の部分で絶大な教育的効果が期待されています。E者がそのあたりを意識したかはわかりませんが、この部分は感心しています。

以上の分析を通して、私は、1位にE者、2位にD者を推薦いたします。

以上です。

矢下教育長 保健ですけど、私は保健という科目の内容に各者それぞれ工夫をされているという前提の上で、ほかの科目でも主体的に学ぶためには、その教科の流れ、あるいはその教科の考え方、学習の仕方を大事と考えて見ているので、この保健の内容を学習する上で、学習の考え方、流れから、全部の教科書もまた確認をさせていただいております。

A者は、この教科書の使い方で学習の考え方・流れ方が簡単に取り上げられております。各単元での考え方を身に付けるよりは、「やってみよう・話し合ってみよう」という活動に重点が置かれているように感じました。

B者は、教科書のはじめには、この教科の学習の流れがどうだといったことや、あるいは構成については示されておりません。そういった内容については各単元の指導に任されていて、ちょっとそういった子供たちが深く主体的に考えていく面では弱いかなというふうに思います。

C者は、学習の進め方を、その内容を教科書のはじめに示していて、各単元もそれに合わせた構成となっております。

D者は、教科書のはじめに保健の学習として1時間の学習の進め方が示されて、さらに各単元の内容がこの順番に展開して深めたい内容が加えられているところもあります。保健の見方・考え方を身に付けることが強調されているという内容でした。

E者は、この教科書の使い方の中で、学習の流れ・進め方、活動内容が示されておりまして、各単元の中でもそれらのことがわかりやすくなっていて、学習がしやすいというふうに感じました。

こうした学習の流れですとか進め方、課題解決の方法、仕方とかいった点から、1位にD者、2位にE者を私のほうは推薦させていただきます。

ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをいたします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にD者を挙げられた方が3名、B者とE者を挙げられた方がそれぞれ1名です。第2位には、E者を挙げられた方が3名、D者を挙げられた方が2名となっております。結果として、1位にD者を挙げた方の数が3名と最も多く過半数を超えております。このことによりD者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、保健についてはD者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、保健についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名について、指導課長、お願いします。

指導課長 それでは、仮決定のD者についてでございます。発行者名は学研教育みらい、図書の名前は「みんなの保健」。

以上でございます。

## 英語

矢下教育長 続いて、英語についてご審議願います。発行者は7者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について順序をつけてご発言願います。

末廣委員から順にお願いをいたします。

末廣委員 小学生に要求する英語の力は、いろいろと教科書を見ていますと、やはり一番は聞き取りとといいますかリスニング、ちゃんと聞くということ、これはビデオなどを見る、そしてその音声があればそれを聞く、これがまず第一ではないかと思えます。小学生がまず習得してもらいたいのは、よくほかの人がしゃべっているのを聞く、聞き取るというのでしょうか、それが一番大事なことで、それが時間的にも教科書を見るとさかれています。その後その反応とといいますかアクティビティを考えている、それで最終的に読み書きですね、というふうに行くのではないかと思えます。

そういうことを考えますと、とにかく小学生は相手のしゃべっていることをちゃんと聞けるか、聞き取れるか、それが一番大事だと思います。それから先に進んでいくことです。その聞き取りがある程度できてグループでの行動、コミュニケーションの場面をやはりこれは教科書でもとっているというふうを考えられます。そういうことをまず一番重要な観点というふうを考えますと、私は英語は2位はD者、1位はC者というふうを考えます。

それで、D者の教科書の進め方も、聞く、そして話す、人と伝え合うとか人を紹介するとか、自己紹介とか発表するとか、それは「Let's try」というふうに書かれていますが、そしてその後読み書きですね、そういう形でlisten。それから、Let's playとかtryとか、ちゃんと答えるという、そういうような感じに構成されているというふうに思えます。それで、各ユニットの最初にその目指すゴール、そのユニットが目指すところが示されています。そういう意味ではわかりやすい構成になっています。

C者は、先ほども申し上げましたように、その音声に慣れ親しむですね、音声をちゃんと聞き取れるかという、そういう時間を多くとっている。例えばあるチャプターでは、まずビデオ「Let's go」、それから「Let's listen」、listenは1・2・3があって、その後ちょっと考えなさい、think、それからactivity、「Let's say together」、一緒に言いましょう、それからその後、「Read and write」、そういうふうにと並んでおります。こ

れを見ますと、やはりlistenをちゃんとできるようになるということが重要ではないかということで、そういう点から言いますと、そのlistenから初歩的な「Read and write」に流れが意識されているということで、英語のC者が1番、それからD者が2番というふうに考えます。

矢下教育長 続いて、垣内委員、お願いします。

垣内委員 今回はじめての英語のテキストということですが、小学校の中学年で外国語に慣れ親しむということが、今授業の活動の中でも行われておりますけれども、それにつなげて、さらに中学校の英語につながるような形での、この英語であろうというふうに理解いたしました。その観点から、英語に親しむ、特に発達段階を意識して学年との接続というのがきちんとできているのか、また、今回はじめてということなので、教える側の先生方の、その経験値に関わらず教えやすいのかどうか、そして学ぶ生徒さんの側から、児童の側から見たときに、その学びについていきやすいのかどうかという、この三つの観点から比較をさせていただきました。

いずれの教科書も非常に情報量が多くて、語彙も、それからさまざまな関係する情報も内容量も十分過ぎるほどご用意されているわけですが、先ほどの3点からいきますとやはり1位はD者を推薦したいと思います。第2位以下はなしということでお願いをしようと思っております。その理由について今からご説明いたします。

D者の場合、基本的に語彙や基本表現を確認・発展させるという観点で、小中の接続に生かす形状が含まれております。中学校英語まで円滑に接続するような工夫がされているということ。そして、音声に十分慣れ親しんだ後に、今度は授業から今度は話すという活動を経て書くという指導が無理なく行われるようなステップが、プロセスが明確に示されているというところを高く評価いたしました。もちろんその各単元の最後にゴール・振り返りというものがありますので、見通しをもって学ぶことができるかと思えます。

英語習得の流れを考えますと、先ほどほかの委員の先生もおっしゃいましたように、語彙とか基本表現というのが自然に定着するということが重要かと思えますけれども、これに関して、話す、聞く、そしてアクティビティ、活動ですね、それから考えるということで活用・応用という流れが示されていて各領域をバランスよく配慮していると、少しずつ各活動を取り入れていくことによって、本格的な英語教育、中学校以降の高度な英語教育につながるという点を高く評価いたしました。

また、各単元の学習要素がページの同じ位置に配置されているので非常にわかりやすい。また、見開きのページの上にステップ1・2・ジャンプといったような文字があって、どこを学んでいるのかということの学ぶ生徒側からもよくわかるというような点も大変工夫されているかと思えます。ほかにも幾つかの工夫がありますけれども、それはほかの教科書も同じかと思えますので、私は第1位、D者で、第2位はなしということでお願いをいたします。

矢下教育長 続いて、高森委員、お願いをいたします。

高森委員 科目名は外国語で、種目名は英語ということですが、小学校の教科用図書としてはじめて披閲したこの英語のテキストですが、まず最初に思ったのは、教員の指導書がもしあればそれを見てみたいということでした。つまり、各者の教科書を通覧したところ、その第一印象は教科書だけでは実際の授業の組み立てや学習の進め方がイメージしにくいということでした。教師の発問や働きかけ・関わり方も無限に広がる気がしまして、捉えどころがないという部分も多いという印象です。この点は、ほかの教科とは別次元の難しさがありまして、また、リスニング教材や二次元コード教材なども活用されるということになりますと、それらの活用方法・使用頻度次第ではそれらテキスト以外の教材等の審査も必要ではないかと感じました。

小学英語は、従来の中学英語を前倒しにすることということが目的ではなくて、長いスパンで段階的に子供たちが英語に触れる、慣れ親しむ機会を増やし、かつ、日常的に英語を活用する機会を保つということに主眼が置かれているものと認識しておりますので、中学英語のように聞くこと・話すこと・読むこと・書くことを短時間に同時進行で進めていくことは念頭に置かないほうがよいと感じています。今までのやり方を低年齢層に引き下げだけの英語、外国語教育は必ずしもうまくいくとは思いません。したがって、この度の英語の教科用図書の選定には、リスニング、トークキング、リーディング、ライティングの比重に気をつけながら、我々が母国語を習得するような段階を経て、英語が自然に身につく、発音やイントネーションや文法事項が完璧ではなくとも英語を自在に活用できる程度の能力を開発する工夫がなされているかどうか、そのことの実現のために教師の関わり方が合目的的に位置付けられているかどうかをイメージしながら比較・検討を行いました。これらの分析を通して、私は、1位にF者、2位にD者を推薦いたします。

まず冒頭の部分で目についたことですが、「教室英語」について、F者は、5年の巻頭8ページのみにあり6年生にはありませんが、実はF者の場合は別冊がありまして、別冊の表2・表3に、要するに表紙を一枚めくったところと裏表紙の内側に「こんなときどう言うの?」という項目を設けて、2年間の学習で使う教室英語や対話で用いられる常套句が整理されています。一方、D者は5・6年巻頭で同様に教室英語が設けられていますが、こちらは挨拶や返事程度の簡単な会話にとどまり、シチュエーション別のやりとりで使う表現が少ないという印象があります。別冊に仕立てることで学年が上がっても活用できるという点でも、F者は工夫されていると思います。

次に、単元の進め方について、D者は各単元を順を追って淡々と進めていくスタイルで、それぞれの単元の有機的関連性にはさほど重きを置いていない感があるのに対して、F者は、大単元を基軸に小単元が割り振られて、それら大単元ごとに一定のねらいが定められていて、小単元のシチュエーションが固定されている点が大変好ましいと思いました。例えばF者の5年生では、1年間の学習が「自分のことを紹介しよう」、「地域のことを紹介しよう」、「日本のことを紹介しよう」といった3本立ての大単元で構成され、それぞれの目当てに符合した小単元の活動が展開されています。

次に、個別的視点では、5年生と6年生から1例ずつ取り上げて比較してみます。まず、5年の道案内の活動について比較したいと思います。

F者の場合は5年生の「Unit5」で、46ページから8ページにわたり、D者は5年の「Unit8」、96ページ以降、8ページにわたって道案内の活動が展開いたします。子供たちが日常生活で恐らく最も多く遭遇するであろう道案内という場面の練習が、他者と比べてもこの2者は大きな單元の中にしっかりと位置付けられていて、学習時間を確保していることがわかります。ただし、F者は物の場所を尋ねる活動、道を尋ねたり答えたりする活動などがそれぞれほぼ1ページにおさまるように工夫されているのに対して、D者はそれぞれの活動を展開するHop・Step・Jumpのレッスンのいずれも見開き2ページにわたるといふボリュームになっています。全体的にD者は、F者よりもボリュームある活動になっているという印象があります。しかしながら、ここでもF者は別冊をうまく活用しまして、例えば道案内で使用する直進・右左折などの用語や、物の場所を指定する前置詞の使い分け、これらが別冊の23ページに図解で簡潔にまとめられていて、一方のD者は本編に一部の前置詞の図解しかありません。

次に、6年生最後の将来の夢について話し合う活動を比較してみます。

F者は、大単元の「Open the Door3 中学校への扉を開けよう」を二つの小単元に分けて、「Unit7」では小学校の思い出を回想し、「Unit8」でカードを活用して夢を発表する活動方法を用意しています。あまり盛り込み過ぎず、中学校への進学に夢が広がるよう配慮されていることが読み取れます。これに対して、D者は、大きな単元のくくりはなく、「Unit7」で小学校生活を振り返り、「Unit8」で将来の夢を発表させる活動がありますが、続く「Unit9」で中学校生活への展望と将来の夢について発表するという流れになっており、厚みのある内容にはなっております。ただし、「Unit9」では部活動を具体的に選択する場面があったり、進学予定の中学校の実情にそぐわないケースがあった場合に、あるいは柔軟性に欠けるのではないかとと思われる点、また、中学校生活に具体的なビジョンを持っていない小学6年の段階では、限定的な選択肢を提示すると一部の児童は思考停止に陥るのではないかと、全体的な活動が成り立たないのではないかとといったことが危惧されるところです。

次に、付録の辞典類について、F者は別冊の「Picture Dictionary」で、D者は巻末の「絵辞典」で、学習する語句の辞書がそれぞれイラスト入りで紹介されてどちらも充実していますが、やはりF者の最大の利点は、別冊化によって学年が上がっても継続して同じ資料を使えるので、6年生で5年生での既習単語やフレーズを確認できるという点ではないかと思えます。特に、F者の別冊の32ページ以降には、5・6年の各単元で用いた基本的表現がまとめられていて、学習した言い回しをいつでも振り返り活用できるという点で実用性が高いと思えます。D者の各学年巻末にも当該学年で学習した表現はまとめられていますが、6年の教科書には5年で学んだ表現のまとめは実はありません。6年生は6年生のまとめしかないのです。また、別冊化の最大のメリットは、F者の場合は、その中に授業



で学んだ単語やフレーズが網羅されているので、教科書自体はF者は大判なのですが、その大判の教科書本体を手にとらなくても、コンパクトな別冊さえあれば常の英語活動が教室の中で行えるという点があるのではないかと思います。

全体的に、F者は、大単元と小単元の構成が首尾一貫しており、また、2年間の活動も一連の流れの中に組み込まれている点が高く評価できました。冒頭で指摘したりスニング、トークキング、リーディング、ライティングの比重についても、2者とも比較的にリスニング、トークキングに重点を置いておりまして、好感が持てます。また、学習活動の内容に関しても、F者は、英語に対する専門的知識や英会話の経験の少ない教師でも無理なく活動が進められる内容になっている点も評価したいと思います。

一方のD者は、どのページを開いてもコンテンツが充実している、先ほど垣内委員がおっしゃったように非常に充実しているので、厚みのある学習活動をイメージできるのですが、それが逆に英語スキルが成熟していない教師への負担になるのではないかと思います。中学英語への接続ということがしばしば指摘されますが、私は、小学英語は接続はあまり重きを置いて考えないほうがいいのではないかと思います。中学校には専科の英語教員がいますけれども、小学校にはそれはいないという、そういった現状をよくよく考えなければいけないと思います。その点でも、F者の場合は、教師の側も児童の表現力の広がりだとか、深まり・高まりに寄り添う形で、目的にかなった働きかけができるよう工夫されていることなどもありまして、これらの点を踏まえて、私は、1位にF者、2位にD者を推薦いたしたいと思います。

以上です。

矢下教育長 外国語としての英語でございますけれども、これまで教科ではなくても英語を児童は学んできておりますけど、改めて教科となりましたので英語への導入が、5・6年生で習うことがわかりやすいかというようなことから教科書をまず見ております。

それから、時間数等も増えてきたわけなので、できるだけ負担感が少ないものと考え、学ぶべき目的や内容がわかりやすくなっているかどうか、英語の読み書き、聞く、話すことになじみやすくなっているかという点についても見ています。さらには、その内容を英語嫌いとならずに中学校へつなぐことが大切だと考えておりますので、そのために学んだ内容を頭や体を使うこと、実践を通して身に付ける、確認していくことが必要であるといった点を中心に内容を見てまいりました。そして、1位をD者、2位をC者というふうにさせていただきます。

それぞれの推薦した理由ですけれども、D者については、教科書の最初に「英語で世界へ 英語は世界中のさまざまな国の人々と気持ちや思いをつなぐ、伝え合うための手段です」として、学ぶ目的がより明確になっております。その後で、例えば5年生でできるようになること、「Let's start」が10ページあって、学ぶ内容の範囲を明確にした上で、これまで児童が勉強してきた内容の復習と、5年生への導入に十分にページを割いております。したがって、教科としての英語に慣れることにも十分にページが割かれているとい

うことになります。

各単元、ユニットの中で、ゲームや「Let's chat」、「Let's write」という形でさまざまな補助教材、カードなどを使って頭や体をフルに使って内容に対する関心を高めて理解をして定着を目指しています。さらに巻末では、補助教材のピクチャーカードや文字練習用のミニホワイトボードをユニットに関連して使用することでさらに効果的な英語の学習が進められるというふう感じております。

C者については、教科書はじめに8ページにわたってあって、さらに「Start together」でこれまでのまとめや5年の内容へつなぐことにより配慮がされております。また、レッスンの一つ一つの内容が極めて簡潔で見やすく負担が少なく、取り組んでいくのに取り組みやすく学習しやすいのではないかと考えております。

それから、各単元の最後には単語や基本表現を使ったコミュニケーションを行う活動がそれぞれに設定されておりますので、児童が主体的に英語表現を学んでいくことができます。さらに、巻末のワークシート集にはさまざまな利便性があり、ほかの活動にも使いやすい、そういうふう感じたところです。

そういった点で、先ほども申したとおり、首位にD者、2位にC者を推させていただきます。

続いて、樋口委員、お願いいたします。

樋口委員 新しく始まる教科なんですが、私は大学が全て英語の世界でして、学生、教員全て英語で講義をし、英語でディスカッションをし、英語で論文を書く学部で、もう14年あります。年間、答案も300枚以上の答案を見ます。能力がある学生とそうでない学生の違いはしっかり文章が書けるかどうかでして、英語のスペルをしっかり書ける学生と書けない学生では歴然とした差があります。私は入学担当の教務主任をしておりますけれども、我々のところに来ている学生は世界48カ国にもものぼりまして、彼らの発言も全ていろんな英語がありまして、英語に標準語はありませんのでやはりいろんな英語が出てきます。そういう中で、先ほど言われたような世界の共通語である英語をじゃあ今の台東区の子供にどう教えるかというところが大きな問題になるわけですし、普段は日本語の世界で生活している子供を外国語の世界に持っていこうというところでございます。

よく言われる話は英語嫌いにしないようにすることがまず第一、その嫌いにさせないところはまず教員が指導力をもって生徒を英語の世界にうまく導き入れることが重要ではないかと思えます。そこでよく言う話は、最初から全部英語の世界に行けば慣れてくるんじゃないかという話ですけれども、小学生のレベルではそれに関しては無理だろうと。

教科書ですけれども、E者の、最初に5年生でできるようになること、6年生でできるようになること、そのページに聞く・読む・話す・書くについて、聞くときにはどういうことに注意したらいいのかというふうにして話題を想像する、細かい情報を聞き取る、大まかな内容をつかむ。読むについては、文字を耳で追う、必要な情報を聞き取る、尋ね合う、伝え合う。話す、尋ね合う、他人のものを紹介する、自分のことを話す。書くについては、

語句をなぞる、書く、選んで語句を書くというように、しっかりそれぞれの目標、ないしは各児童がある局面において何をしたらいいかということがちゃんと日本語で明記されておりまして、ここにおいて生徒はこういう状況においてどうしたらいいのかというのが日本語で一応考えて対応ができるようになっていくことが大きなポイントになるだろうと思います。

それに加えて、話題の大きさについては、児童がすぐ、いわゆる共鳴しやすいトピックスがたくさん盛り込まれていること、単元の最初と最後にゴールと振り返りを明記しておりまして、そのそれぞれの単元の学習内容が一貫して紹介されていること、なおかつ習得することができる。文字が見やすい、さらに巻末に絵辞典がありまして、絵を見て単語をいわゆる習得することができるというところが大きなポイントであります。

その一方で、第2位にC者を挙げさせていただきたいのですが、これについて一番日本人の弱さでありますその音声に慣れるということについて特に配慮しておるところでありまして、ここは2位に推したところですが、さらにそれに加えて年間の学習目標がしっかりしていることにおいて教える側にとって非常に使いやすい教科書になっているのかなという感じがします。

以上によって、1位がD者、2位をC者にします。

以上です。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位はD者を挙げた方が3名、C者とF者を挙げた方がそれぞれ1名です。第2位については、C者、D者ともに2名の方が挙げられております。結果として、1位はD者を挙げた方の数が3名と最も多く過半数を超えております。このことにより、英語についてはD者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、英語についてはD者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、英語についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名について、指導課長、お願いいたします。

指導課長 それでは、仮決定のD者についてでございます。発行者名は光村図書、図書の名前は「Here We Go!」。

以上でございます。

## 道徳

矢下教育長 最後に、道徳についてご審議願います。発行者は8者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

それでは、垣内委員から順にお願いをいたします。

垣内委員 道徳はよりよく生きるための基盤となる道徳的価値観、価値の理解、それから自己を見詰め物事を多面的・多角的に考える力、判断力、実践力などを育むという、そういうのが目的となっております。そのために柱としては4本あって、自分、人との関わり、それから集団社会、ここに特にいじめの問題も関わってこようかと思いますが、そのほか生命・自然という四つの柱があるという状況になっております。

いずれの教科書も非常に工夫されておりますし、情報量も豊かですし、教材も共通しているものも見られるわけですが、私といたしましては第1位にH者を推薦したいと思えます。第2位がA者であります。

いずれの教科書も学習指導要領の内容を漏れなく扱っておりますし、学習の目標や進め方といった構造についても十分示されている。また、先ほど申しました道徳の四つの視点についても明確化して各テーマが示されているし、関連したデジタルコンテンツなども備えているという非常に甲乙つけがたい状況になっていたところではありますけれども、第1位に推薦させていただきましたH者に関しましては、最初に学習のプロセスというのがありまして、これから学ぶことが非常にはっきりとわかる、そこに「話し合いの約束」というようなことも書かれていて、より子供たちが実践的に学ぶ際に具体的に必要となるような情報が提示されているということがあります。

冒頭に「道徳の学習を進めるために」として授業の進め方が示されておりますけれども、そこには「気づく・考える・話し合う・振り返る・見詰める・生かす」といったような参考例が示されてありまして、見通しをもって学習が進められるというような状況になっております。また、巻末には「学習の記録」というものがありまして、学習状況自己評価できるようになります、これも道徳の場合はやはり自ら勉強し自ら学んだことをどこまで学んだか自分で認識するということが非常に重要なので、こういった工夫も高評価につながりました。

また、2学年の場合は二段階、6学年の場合は三段階評価になってありまして、「学習のまとめ」のページでは学期ごとに学習の振り返りができるようになっているということです。

それから、2点目といたしまして、これはほかの教科書も全ていじめ防止、あるいは生命の尊重といったようなことも書かれておりますけれども、特にH者の場合はいじめ防止と情報モラルというものを全学年で重点事項として教材とこれと組み合わせ配置しているという点も、昨今の状況を考えますと効果的なテキストではないかというふうに思いました。第1位がH者。

第2位のA者、こちら冒頭に「道徳の学習を始めよう」というようなことで、ここでは

人の気持ちを考えるというようなこととか自分自身の生活を振り返るというようなことが説明されております。

また、学級づくりのページにおいて自己紹介新聞なども紹介されているという意味で非常に工夫がなされているかなというふうに思います。また、振り返りにつきましてもきちんと準備されておりまして、内容に関する質問も自己評価及び保護者に対して、内容項目に関する設問も掲載されているという意味でよく工夫された教科書ではないかというふうに思いました。

どちらも本当に甲乙つけがたいと思いましたが、総合的に見たときに、やはり構造的にわかりやすく、何をどういうふうに学んでいくのか、特に自分がどういう形で学んだことを理解するのかというような視点から見たときに、H者のほうが良いかなという評価で、H者が第1位であります。

以上です。

矢下教育長 続いて、高森委員、お願いいたします。

高森委員 道徳科については、私は次の四つの観点で比較・検討いたしました。

第1の視点は、道徳という教科の説明、道徳学習の意義、学習の進め方についての確な記載があるか否かについて。

視点の第2は、使用された教材の種類について、定番教材と呼ばれる教材の活用率、創作・物語・童話などのフィクションの教材と、実話・ドキュメンタリー・時事問題・歴史上の人物伝などのノンフィクションの教材の配分・バランスなどを確認しました。また、「四つの視点」、すなわち、自分・他者・社会・自然界の各ジャンルで分類した項目それぞれに偏りなく教材が配当されているかどうか、また、全体を見通すことができる工夫がなされているかどうかについても検討しました。

視点の第3は、今述べた第2の視点とは別の観点から各教材を分析し、道徳教材にありがちな努力・克服・達成・成功話などの美談ばかりでなく、失敗・挫折・苦悩・罪意識・慚愧・後悔の念・償いなど、時に後味の悪い印象すらも与える事柄を題材にした教材の有無・分量・内容についても分析しました。

第4の視点は、台東区立小学校の単位時間45分で年間35週の授業時間として、各教材の分量は適切か、また全体の構成がバランスよく体系づけられているか、限られた授業時間内の学習の進め方、発問の具体例、話し合い・実践などの内容に無理がないかなどについても分析しました。

これらの分析を通して、私は、1位にA者、2位にH者を推薦いたします。

視点の第1番目の道徳という教科の説明、道徳学習の意義については、例えばB者は、今回候補に挙げていませんけれども、B者のように教科書冒頭で充実した文章量で解説している教科書もありますが、おおむね各者とも簡潔に触れられる程度にとどまります。H者も各学年4ページ下段に50～80文字程度の簡単な説明があります。一方、A者には、道徳の定義付けに関する説明はなく、かわりに各学年本編の2・3ページ見開きの「道徳の学習を

始めよう」を充実させて、道徳における「きづき」と「まなび」の具体像を提示することで、抽象的な定義付けによることなく道徳科の学習の意義を伝えようとしている点において優れていると思われます。

道徳学習の方法については、先ほど垣内委員からのご指摘ありましたように、H者はなかなか優れていると思うのですが、H者は冒頭4～9ページにわたって「気づく」、「考える・話し合う」、「ふり返る・見つめる」、「生かす」の四つのステップを提示し、学習の進め方を説明しています。これに対してA者は、今申し上げた本編の「道徳の学習を始めよう」ではなくて、別冊の巻末の「まなびのヒント」において、話し合ったり演じて考える際の具体的な態度や心構えについて説明していますが、他者に見られるようなステップ方式の説明はありません。この部分は、H者のほうが整理されてわかりやすいかなと思いました。

視点の第2、使用された教材の種類について、まずは道徳科の定番と呼ばれる教材の活用率ですが、例えば具体的に申し上げますと、中学年では「金色の魚」、「ブラッドレーの請求書」、「泣いた赤鬼」、「窓ガラスと魚」、高学年では「手品師」、「ベルフラワー」、「星野君の二壘打」、「イエローカード」、「銀の燭台」、「青の洞門」などのような教材がどの程度取り入れられているかについて比較しました。

今回選考に上がった各者とも、おおむね各学年、2～3点は定番教材が用いられる傾向にありますが、H者は特徴的で、逆にこの定番教材の活用が少なく、教材の活用の仕方に独自性が見受けられます。これに対して、A者は他者よりも定番教材を比較的多く用いる傾向が読み取れます。定番教材を活用することの利点というのは、台東区だけではなく、台東区以外の他の自治体の学校で異なる教科用図書を用いたとしても、そこで蓄積されてきた定番教材の授業実践のノウハウを教員間で共有できるという点にあるのではないかと思います。一方、H者の場合はH者の教科書を使用している教員間でしか情報を交換できないという弱点があるのではないかと思います。

なお、教材の種類に関連しては、先ほど申し上げた創作・童話などのフィクション教材と、実話・時事問題・人物伝などのノンフィクションの教材の配分・バランスについても比較・検討いたしました。この点においては2者とも適切な配分になっていると感じました。特に人物に着眼した教材は、その人の生き立ちや境遇などが非常に特殊なケースも多く、子供たちが自分の身に引き当てて考えたり、自分の境遇に引き比べてみたりすることが難しい点がある一方で、自分とは異なる境遇や未知の体験談を知ることで、新たな「気づき」が持てることを期待するものでもあります。

なお、A者には、ダウン症と向き合いながら書道家として活躍している台東区出身の金澤翔子さんを題材に扱った単元が6年生の84ページにあり、独自性を出しています。

また、視点の3番目の心が晴れ晴れとするような美談と深く考えさせられる重いテーマの比率については、低学年ほど前者のほうが多く、高学年になるに従って後者の内容のものが多くなってきます。失敗や挫折・苦悩・罪悪感・償い・反省などをテーマにした教材

としては、例えば定番教材では「ブラッドレーの請求書」、「星野君の二塁打」。「銀の燭台」などが該当するでしょうか。中学生になるとさらに後者の割合が増大するのですが、難しいテーマを子供たちに突きつける道德教育の真髓がこの部分にあると思いますので、あとは教員の力量が問われるところです。

視点の4番目の学習の進め方や活動の内容については、各者共通に用いられている教材で比較することが必要となります。そこで、定番教材にもなっておりますけども、A者3年の「ブラッドレーの請求書」と6年生の「星野君の二塁打」、H者4年の「お母さんの請求書」と6年の「星野君の二塁打」とをそれぞれで比較しました。

なお、H者の場合は、厳密には他者とは教材の扱いが異なりまして、「お母さんの請求書」は「ブラッドレーの請求書」のテキストを改変した、改めた内容になっておりますが、これには深い意味があることに気付きました。

また、同じく教材の「星野君の二塁打」は、漫画風の構成でストーリーが進展するのがH者の特徴、こうした部分にもH者が他者にはないオリジナリティーを出そうとしている一面を垣間見ることができます。

比較の結果、振り返り・発問・記録・自己評価、話し合いや実演の中身については、他者、例えばB者やC者では3点以上発問や活動が提示されるのに対して、A者・H者とも「考えよう」、「見つめよう」などといった投げかけを中心にほぼ2例ほどにおさまられており、限られた時間を有効に活用するよう工夫されていることがわかります。

また、A者は、別冊の強みを活かして、教科書を開きながら同時進行で学習を進めることができる点も特徴的です。さらにH者と異なって、A者の別冊には自分や他者の意見などを書き込める記入欄が設けられており、単に意見を話し合うだけでなく、文字にして書きとめるという活動を取り入れている点が評価できます。この点、H者の場合は筆録・筆記には別途ノートが必要になるので、ノートを必要としない上に考え方のヒントも提示されているA者の別冊の機能は高く評価できます。

次に、発問の内容について、2者とも大きな違いは、先ほども申し上げたようにないのですけれども、特筆すべき点を一つだけ挙げたいと思います。H者の教材について取り上げたいのですが、H者が取り入れた「問題を見つけて考える教材」、これは非常に特徴的なのですけれども、これは各学年1～2点ほどありまして、目次を見ますと黄色い帯を枕にした見出しがその「問題を見つけて考える教材」に該当します。実はこの単元は、当該教材の末尾に、同者のほかの単元の「考えよう」とは異なって「考えるステップ」が意図的に設けられています。先ほど指摘したH者の「お母さんの請求書」が定番教材の「ブラッドレーの請求書」をそのまま転載していない理由もここにはありまして、他者で使用されている「ブラッドレーの請求書」は文末に主人公のブラッドレーが母親に対してかけた言葉が引かれているのですが、H者の「お母さんの請求書」のほうはその言葉が省略されています。そのかわりに、単元末の「考えるステップ」の中で、主人公のたかし君、ブラッドレーではなくてたかし君なのですが、たかし君が母親にどのような言葉をかけたか考え

させる発問が用意されています。自分の思いを言葉にして相手に伝えることの難しさと大切さを学ぶ機会をあえて設定している点は、H者を高く評価できるかなと思います。この活動は一部の教材に限られていますけれども、アクセントとしては効果ありと認めます。

そのように特筆すべき点は他者にも散見されるのですけれども、これまで述べてきたように、総合的に分析した結果、私は、1位にA者、2位にH者を推薦いたします。

以上です。

矢下教育長 続いて、私です。

道徳の教科についても、私、今回ずっと言っていますが、道徳の学習の仕方、考え方ですとか、その身に付け方等を見てまいりました。それから、道徳という教科を学ぶということは、やはり途中よりは教科書のはじめにはっきりとあったほうがいいかなとも考えております。また、その考え方、学習の仕方、それから道徳という教科を学ぶということが全学年共通して同じ内容が示されたほうがいいんだということからまず見ました。この点からまず見ていくと、道徳の考え方、学び方については、別冊のノートを使って一体的に説明しているという点でA者、それからさらにその流れや考え方を説明が丁寧でわかりやすい点ではF者、H者を挙げたいと思ったところです。

それから、今、別冊のノートというふうにお話をしたんですが、今回の中で別冊のノートを付属しているのは3者ございました。A者はノート、内容項目ごとに整理をしていく、その教材ごとの発問に対して児童が自分の考えや友達の考えを書くスペースがあるといったことで、非常に使いやすい類のノートです。B者のノートは、本文の中心的な疑問に答えて自由に使えるようになっております。自分の考えや、あるいは担任の教員がその使い方を指示したり、いろいろ使い方ができるといったノートとなっています。G者のノートは、教科書の内容に加えて別の内容が取り上げられていて、その内容に対しての発問に答えていく部分と、さらにはノート後半は感じたこと、考えたことを自由に記録できるスペースというふうになっています。

そして、これらのノートの比較なんですけれども、単にこの教科の別のノートを持つ必要がないというふうに考えれば、本文にさらに補充していくというよりは、当然、教科書の単元の内容に沿って考えて、その内容をまとめていく、深めていくという点でA者のノートが使いやすいというふうに考えております。

それから、各教科書を今回改めて見ていく中で、基本的なことなんですけど、各教科書の各単元の内容をどう理解していくかというときに、考え方を導いたり、その考えている内容を深めたりということで、各教科書で発問数が違ってきます。それで、そういうふうに改めて見ていくと、各教材、内容に対してされている発問の数自体は、内容に取り組む教員と児童のその自由度が高くなったほうがいいのか、あるいは指導の点や、さらには主体的に考えるという面が若干強くなる道徳という教科では、全然ないと困りますけれども、発問数は意外と少な目のほうがいいのかなと、比較していく中で考えるようになりました。発問数が少ないという面からはA者、F者、H者というのが同じように少なくなっている。



以上の点のような点を幾つか比較をした上で総合的に考えると、1位にA者、2位にH者を私は推薦したいというふうに考えております。

以上でございます。

続いて、樋口委員、よろしくお願いいたします。

樋口委員 もう既に皆さんが評価を与えられておりますので、ダブらないような形で選考結果だけ申し上げたいと思うんですが、1位をA者、2位をH者にしたいと思います。

そもそも道徳の教科ですけれども四つのポイントがございまして、一つは自分自身をどうするか、二つ目は人との関わり合いの中でどうよく生きていくか、3番目は集団社会の中でどう接していくか、4番目は与えられた環境及び自然の中でどう関わり合い生活していくかというところがポイントになるかと思えます。この4ポイントをどう教えていくかというところにおいて教科書が構成されておまして、各者はそれに対して配慮が行われております。

そうしますと、その中でじゃあどうやって選択していくかの話ですけれども、まず重さの問題がやっぱり大きいだろうと思ひまして、重さを比較しますとAとGとHがいわゆる軽いほうの部類に入ります。その中で今、冒頭に話した4ポイントについてわかりやすく、各教科書、各学年、大体30から35の間でトピックスがちりばめられておまして、それぞれにおいてこの四つのポイントについて各文書を読ませて児童に気付かせる、及び相互に対話して理解をさせるというところがございます。そこにおいて読みやすいところがいわゆる重視されるべきだろうと思ひます。そこで、Aが最も読みやすいんではないかと思ひます。A者は、それに加えまして、生徒自身が実際にノートに書くというところにおいてその教科書サイズの道徳ノートがついていること等の優位性がございました。さらに、心のパレットをねらいとするその学習目標がしっかりしておまして、特に共に生きるということを重視しております、昨今の重要な問題に対して特に配慮がなされていると考えられます。

一方、H者ですけれども、H者は巻頭に道徳授業の進め方が明示されておまして、これは教える側に非常に使いやすい教科書になっているだろうと思ひました。さらに、昨今のインターネットの問題で、インターネットを使った学習ができる教材も取り入れつつ、ケースでも協力して、昨今の問題についてもいわゆる学習ができるようになってきているということ。気付く、考える、話し合う、振り返る、見つめる、生かすということについてのこの配慮については、H者もA者に負けず劣らず配慮がされているところで、2位にH者にしたいいと思ひます。

以上です。

矢下教育長 続いて、末廣委員、お願いをいたします。

末廣委員 私は、A者を1位、それからC者を2位にしました。

2位のC者からですが、この各教材の末尾に「考えよう、話し合おう」というコーナーがあります。このところでいろいろ声が設定されているということで、先生も教えやすい

のではないかなという気がします。

それから、今問題になっているのはいじめのことですが、各教科書、いじめについてはいろいろと触れておりますけれども、Cの場合には各学年でいじめのことを二つ題材として選んで、あと、情報モラルに関しては一つそれぞれ配置をしております。1位にしたA者は、気付きというのはいわゆる本来の教科書です。それから学びと、分冊されておりますが、これがノートで分かれておりまして、ある意味では丁寧なノートの展開をしております。また、各教材のねらいとするその価値はどういうものかということ。「心のパレット」に明示しているんですね。これは、ここまで教科書がやっちゃっていいのかという気もしますが、教師としては非常に指導しやすい。例えば6年生の一番最初に出てくる「友の肖像画」というその題材ですが、これに関しては自由と判断、自由と責任というテーマです。この価値観でどう考えるか。それぞれの教材でこの「心のパレット」では、誠実であること、あるいは節度ある生活、安全な毎日、私らしくあるために、夢の実現を目指す、真理を追い求め探求する、人々の支えに感謝するとか国や郷土を愛する心等々、いろいろな価値観と提示されておりました。教材によっては1つのテーマだけでなくこのうちの幾つかにわたってくるものもあるのではないかと考えられます。そういうことで、ほかの教科書ではない分冊されて分かれてあるというのはまずこのA者の一番の特徴で、いいところでもあると思います。

それから、そのいじめ対応ですが、特にこのA者では、各学年、題材がそれぞれの学年で25から30ぐらいあるところで、各学年、5~7ぐらい、そのいじめ対応の題材があります。それから、情報モラルに関しても、低学年は一つずつですが、上に上がると二つほど出てくるということで、今問題いじめと、情報のモラルが割と数多くテーマとして出されているということがあります。

そういうことで、総合して道徳はA者が1位ということでございます。

矢下教育長 ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをいたします。

(集計)

矢下教育長 ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げた方が4名、H者を挙げられた方が1名、2位にH者を挙げた方が3名、A者を挙げられた方が1名、C者を挙げられた方が1名となっております。結果として、1位にA者を挙げた方の数が4名となっておりますので、最も多く過半数を超えております。このことにより、道徳についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、道徳についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、道徳についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、指導課長、お願いします。

指導課長 それでは、仮決定のA者についてでございます。発行者名は学校図書、図書の名前は「かがやけみらい 小学校道徳」。

以上でございます。

矢下教育長 以上で、小学校教科用図書については全ての教科について仮決定いたしました。

それでは、小学校教科用図書の仮決定した発行者の確認及び審議を行った全ての発行者の公表について、指導課長、お願いいたします。

指導課長 それでは、小学校教科用図書につきまして、仮決定した図書の発行者名並びに書名を改めて確認させていただきますとともに、審議を行った全てのアルファベットにつきまして発行者名のみ公表いたします。

種目、国語。仮決定はD者、発行者名は光村図書、書名は「国語」でございます。その他の発行者ですが、A者、東京書籍、B者、学校図書、C者、教育出版、以上でございます。

種目、書写。仮決定はC者、発行者名は光村図書、書名は「書写」でございます。その他の発行者ですが、A者、学校図書、B者、教育出版、D者、日本文教出版、E者、東京書籍、以上でございます。

種目、社会。仮決定はC者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい社会」でございます。その他の発行者ですが、A者、教育出版、B者、日本文教出版。以上でございます。

種目、地図。仮決定はA者、発行者名は帝国書院、書名は「楽しく学ぶ 小学生の地図帳」でございます。その他の発行者ですが、B者、東京書籍。以上でございます。

種目、算数。仮決定はC者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい算数」でございます。その他の発行者ですが、A者、啓林館、B者、日本文教出版、D者、大日本図書、E者、学校図書、F者、教育出版。以上でございます。

種目、理科。仮決定はB者、発行者名は大日本図書、書名は「楽しい理科」でございます。その他の発行者ですが、A者、東京書籍、C者、学校図書、D者、教育出版、E者、啓林館。以上でございます。

種目、生活。仮決定はG者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい生活」でございます。その他の発行者ですが、A者、大日本図書、B者、学校図書、C者、教育出版、D者、光村図書、E者、啓林館、F者、日本文教出版。以上でございます。

種目、音楽。仮決定はB者、発行者名は教育芸術社、書名は「小学生の音楽」でございます。その他の発行者ですが、A者、教育出版。以上でございます。

種目、図画工作。仮決定はB者、発行者名は開隆堂出版、書名は「図画工作」でございます。その他の発行者ですが、A者、日本文教出版。以上でございます。

種目、家庭。仮決定はA者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい家庭」でございます。その他の発行者ですが、B者、開隆堂出版。以上でございます。

種目、保健。仮決定はD者、発行者名は学研教育みらい、書名は「みんなの保健」でこ

ざいます。その他の発行者ですが、A者、大日本図書、B者、文教社、C者、光文書院、E者、東京書籍。以上でございます。

種目、英語。仮決定はD者、発行者名は光村図書、書名は「Here We Go!」です。その他の発行者ですが、A者、学校図書、B者、三省堂、C者、教育出版、E者、啓林館、F者、東京書籍、G者、開隆堂出版。以上でございます。

最後に、種目、道徳。仮決定はA者、発行者名は学校図書、書名は「かがやけみらい小学校道徳」でございます。その他の発行者ですが、B者、教育出版、C者、光村図書、D者、日本文教出版、E者、光文書院、F者、学研教育みらい、G者、廣済堂あかつき、H者、東京書籍。以上でございます。

確認及び公表は以上でございます。

矢下教育長 それでは、以上のとおり仮決定を確認いたしました。

次に、第36号議案についてご審議を願います。

中学校教科用図書につきましては、先ほど説明いたしましたとおり、各委員にお渡ししてあります、平成27年度採択における資料調査研究の報告書及び資料実績等を踏まえて審議をいたします。

ここで、現在使用している教科用図書に対してこれまでに学校から意見等があったかどうか、指導課長より報告をお願いします。指導課長。

指導課長 それでは、現在使用している中学校における教科用図書に関する学校からの意見等について、ご報告いたします。

まず、現在使用している教科書について不都合がある、もしくは不適切である等の否定的な意見は特にございません。指導課といたしましては、台東区教育研究会に対して現在の教科書に関する使用状況についての意見を聴取いたしました。一例ではございますが、数学で言いますと、「数学的な考え方である類推、帰納、演繹について、既習問題を例に紹介している」、「章のまとめの問題が基礎・応用・活用となっており、習熟度に応じた内容で活用しやすい」等の意見が出ており、その他の教科につきましてもいずれも肯定的な意見が報告されております。

以上でございます。

矢下教育長 各委員からご質問がありましたらお願いをいたします。よろしいですか。

(なし)

矢下教育長 それでは、これより、今回採択する教科用図書について各委員のご意見を伺いたいと思います。お一人ずつご発言をお願いいたします。

まず、議席番号1番の樋口委員から順にお願いをいたします。

樋口委員 今、指導課長から報告がありましたが、教科書の新たな申請がないということで、現場において特に教科書使用について異論がないというところでもありますので、この教科書は引き続き使用ということで認めたいと思います。

以上です。

矢下教育長 末廣委員、お願いをいたします。

末廣委員 同様に、特に今使っている教科書が問題ないということであれば、あと1年ですか、そのまま使うのが一番適当だと思います。

矢下教育長 垣内委員、お願いいたします。

垣内委員 私も全く同意見でございます。問題がない、そしてまた多分なじんでいらっしゃるでしょうから教員の方にも使い勝手がいいと思いますので、このまま継続でよろしいかと思えます。

矢下教育長 高森委員、お願いいたします。

高森委員 私は、教科書を変えることのデメリットのほうが大きいと思ひまして、当然コストの面でもそうでしょうし、先生方が発行者を変えることによって招く混乱がやはり非常に懸念されますから、授業の準備をしなければいけない、教材の研究をしなければいけない、そういったことに貴重な時間を割くということは時間と労力の空費になりますので、できれば1年に限り継続で使用していただきたいなと思ひます。

矢下教育長 では、意見をいただきましたが、私も、あと1年であれば同じものをというふうに考えております。

それでは、ただいまの意見をまとめさせていただきますと、現在使用している教科用図書を引き続き使用するべきとの意見で全員一致をいたしております。これにより、全教科、現在使用している教科用図書を採択することに仮決定いたしたいと思ひます。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、そのように仮決定いたしました。

次に、第37号議案についても審議願ひます。

指導課長より説明をお願いいたします。指導課長。

指導課長 それでは、令和2年度使用 台東区立特別支援学級教科用図書の選択について、ご説明申し上げます。これまでご説明したと重複するところがあるかもしれませんが、ご了承いただきたく存じます。

固定制の特別支援学級におきましては、年度ごとの子供たちの障害の状況や学年の人数構成などに対応するため、教科用図書採択を毎年度行っております。固定制の特別支援学級では、本区が採択した教科書のほか、特別支援学校用文部科学省著作教科書、さらに学校教育法付則第9条により、検定教科書、文部科学省著作教科書以外の一般図書を教科用図書として使用することもできます。本区におきましては、蔵前小学校、松葉小学校、金竜小学校、柏葉中学校の4校にいずれも知的障害の特別支援学級を設置しており、教科用図書の選定に当たっては、特別支援学級の教育目標に基づくとともに、どの教科書が児童・生徒一人一人に適しているかということを考え、調査・研究を行い、調査結果をご報告いただきました。こちらにつきましては、一覧にしたものを8月2日の定例教育委員会にご報告させていただいたところでございます。

4校の教科用図書の選定結果ついてでございますが、蔵前小学校と松葉小学校は本区で採択する検定教科書を使用いたします。金竜小学校におきましては、その検定教科書に加え一般図書7件について、柏葉中学校におきましては、検定教科書に加え文部科学省著作教科書及び一般図書20件について、採択のご審議をいただきたく存じます。

なお、教科用図書の見本として一般図書の一部を机上に置かせていただきましたので、ご覧いただければと思います。

ご説明は以上でございます。

矢下教育長 特別支援学級の教科用図書について、ご質問、ご意見などがありましたらお願いいたします。

はい。

高森委員 先ほど小学校の教科用図書の採択が行われましたけれども、令和2年度に使用されるこの小学校の教科用図書では英語が今回はじめて採択されたわけですが、この英語の教科に関しては特別支援学級では補助をするような教科用図書は必要ないという現段階での判断でしょうか。もう検定の教科書で十分間に合うという判断で、特に補助教材は必要ないということでしょうか。

矢下教育長 指導課長。

指導課長 正直に言いまして、知的障害を伴う子たちの学習でございますので、検定を経た教科書だけでは十分とは言えない部分が多分にあるかと思えます。それは英語に限ったものではないと思えます。それを補填するものとして、各学級にはこれまでの財産である補助教材であるとか、あるいは各学級に入っている一人1台のタブレットパソコンなど、そちらを活用して補助をしていくという指導をしてまいります。

高森委員 わかりました。

矢下教育長 そのほかよろしいですか。

(なし)

矢下教育長 それでは、特別支援学級の教科用図書について、説明のとおり仮決定することについてご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 それでは、以上のとおり仮決定いたしました。

ただいま審議及び仮決定した内容をもとに事務局が議案を用意いたしますので、ここで準備が整うまで休憩といたします。おおむね20分程度と思われませんが、遅れることもありますのでご了承ください。それでは休憩でございます。

(休憩・16:25 ~ 16:40)

矢下教育長 それでは、これより会議を再開いたします。

まず、第35号議案を議題といたします。お手元に、審議した内容に基づき用意した議案

でございます。指導課長、説明をお願いいたします。

指導課長。

指導課長 第35号議案、令和2～5年度使用台東区立小学校教科用図書採択について、ご説明申し上げます。本議案は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき提出するものでございます。

恐れ入りますが、裏面をご覧ください。

先ほど仮決定の際に確認させていただきました発行者教科用図書等につきまして、表にまとめたところでございます。以上が仮決定されたところでございますが、よろしくご審議の上、採択いただきますようお願い申し上げます。

矢下教育長 第35号議案は、先ほどの審議による仮決定のとおりとなっております。本件についてご審議願います。ご意見等がございましたらお願いいたします。

よろしいですか。

(なし)

矢下教育長 これより採択いたします。第35号議案については、原案どおり決定いたしたいと思えます。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

次に、第36号議案を議題といたします。

指導課長、説明をお願いします。指導課長。

指導課長 それでは、第36号議案、令和2年度使用台東区立中学校教科用図書採択について、ご説明申し上げます。本議案は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき提出するものでございます。

裏面をご覧ください。

先ほど仮決定いたしました、すなわち現在、台東区立中学校で使用している教科用図書等につきまして表にまとめたものでございます。以上の仮決定がされたところでございますが、よろしくご審議の上、採択いただきますようお願い申し上げます。

説明は以上です。

矢下教育長 第36号議案は、先ほどの審議による仮決定のとおりとなっております。本件についてご審議を願います。ご意見等がございましたらお願いをいたします。

(なし)

矢下教育長 これより採択いたします。第36号議案については、原案どおり決定いたしたいと思えます。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

最後に、第37号議案を議題といたします。

指導課長、説明をお願いします。指導課長。

指導課長 第37号議案、令和2年度使用 台東区立特別支援学級教科用図書採択について、ご説明申し上げます。本議案は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき提出するものでございます。

恐れ入りますが、2枚目の別表をご覧ください。

蔵前小学校、松葉小学校は、全て第35号議案で可決賜りました小学校教科用図書と同じ検定教科書に仮決定されております。金竜小学校におきましては、その採択した検定教科書以外に、表にございます一般図書について仮決定されているところでございます。柏葉中学校におきましては、第36号議案で可決賜りました検定教科書以外に、表にございます一般図書並びに文部科学省著作教科書について仮決定されているところでございます。

以上の仮決定につきまして、よろしくご審議の上、採択いただきますようよろしくお願いいたします。

矢下教育長 第37号議案は、先ほどの審議による仮決定のとおりとなっております。本件についてご審議願います。ご意見等がございましたらよろしくお願いいたします。

(なし)

矢下教育長 これより採決いたします。第37号議案については、原案どおり決定いたしたいと思っております。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

矢下教育長 ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

以上で、教科用図書採択についての議案の審議は全て終了いたしました。

## 日程第2 教育長報告

### 1 報告事項

#### (1) 庶務課 ア

矢下教育長 続きまして、日程第2、教育長報告に入ります。

まず、報告事項を議題といたします。

庶務課のアについて、庶務課長、報告をお願いします。庶務課長。

庶務課長 それでは、報告事項、庶務課のア、「区長への手紙」等にかかる教育委員会の対応の本年の7月分についてご説明をさせていただきます。資料1をご覧ください。

まず、児童保育課でございます。

お待ちください。今、お配りします。

大変失礼いたしました。それでは、お手元の資料1をご覧ください。まず、児童保育課取扱分、2件でございます。

1件目でございますが、区立浅草橋保育園の放置自転車についてということで、保育園の送迎の時に自転車を放置する利用者がとても多いということで、園の入り口前がちょっと狭い路地で、地震等の際に避難の妨げが心配があるので、園の敷地内に駐輪したらどうかという内容でございます。



続きまして、もう一点が、保育所利用調整における「6ヶ月待機点」についてでございます。この方は、来年の3月に台東区に転入を予定されているということで、最短では来年4月からの入園の申し込みとなるということなのですが、この際の入園審査の指数が「初めての入所希望月から6ヶ月以上待機」の点数が転入だとつかないということに関してご納得がいかないということで、この指数についての撤廃ないしは待機期間を考慮するなどの改定をお願いしたいという内容のご要望でございます。

下段のほうに移りまして、放課後対策担当、2件でございます。まず1点目が、放課後子供教室についてでございます。台東区の小学校の全校で実施されるのか、金曽木小学校にも導入してほしいというご要望でございます。

恐れ入りますが、1枚おめくりいただきまして、2点目が富士こどもクラブについてでございます。富士こどもクラブは先生が多く入れ替わっているということで、先生方が慣れていないのでトラブル発生時や保護者同士の話し合いの中での対応に疑問を感じるということの内容でございました。

続きまして、生涯学習課、1件でございます。生涯学習センターのWi-fiについてということで、地下の音楽スタジオのWi-fiの利用に不便を感じるののでどうにかできないかという内容のものでございました。

続きまして、最後、中央図書館、3件でございます。

1点目が、中央図書館についてということで、書籍やDVD、CD等の管理が非常にルーズで、返却日に返す資料を持参しない利用者が見受けられると、公共の財産であり、待っている人がいることを考慮して欲しい。他区の図書館ではカードを取り上げるなどの対策を行っているので、厳重に注意をして欲しいという内容でございます。

2点目が図書館利用についてということで、こちらの方は台東区内で勤務しており、中央図書館に利用カードの申込みへ行き申込書や身分証明書等を提示したが、在勤・在学証明がなければ申込不可ということで返答があったということで、台東区に勤務するものとして他区の図書館では簡単に作成することができたということで、台東区でも簡易に手続きができるようにして欲しいという内容でございました。

最後、3点目、すこやかとしょしつの利用可能時間についてでございます。すこやかとしょしつは、保健所の3階でございます。こちらの開館時間は、平日の月曜から金曜まで、9時から5時までとなっております。休館日は土・日、祝日になっておりますが、この方、平日に働いていらっしゃるのなかなか利用できないということでございまして、せめて土曜日か日曜日を開館日にしてもらいたいというご要望でございました。

それぞれの質問につきまして、記載のとおり回答させていただいたところでございます。

「区長への手紙」等にかかる教育委員会の7月分について報告は以上でございます。よろしく願いいたします。

矢下教育長 ただいまの報告につきまして、何かご質問はございませんか。

末廣委員 中央図書館の取り扱いのほうで、台東区立の中央図書館のその管理が非常に

ルーズだというんですが、実際にどうなのでしょう。返すべき期日を、もう返却日を超えてずっと借りているとか、そういう人が人数的にはどの程度いるのでしょうか。

中央図書館長 人数は大体月に500人ぐらい、まずは2週間たった段階でその場ですぐお返しになるのが大体500人ぐらいいっちゃって、それからちゃんとご返却という形で、ここにも書いてございますが、まず最初にメールで催促した後に手紙を出すという、何回か段階的にやっているんで、その間にご自分で気づく方、もしくはメールが行ってお返しいただく方等々いっちゃって段階的に減ってくるという形になっています。最終的にはその大体1割ぐらいの方が、その後電話という形になっているということで、だんだんと減ってくるという形になっています。あとは、ここにも書いてございまして、メールの回数等、催促のほうも強化しておりますので、今後また強化について進めてまいりたいと思います。

樋口委員 その遅れた人に対しての何らかのペナルティーというものは、次回の貸し出しに関して一定の条件をつけるということはあるのでしょうか。

中央図書館長 まず、今まで返却期間が過ぎて1カ月たった段階で予約・貸し出しそれぞれについては停止で、できなくなっておりましたが、このたびそれが2週間たった段階で予約や貸し出しができなくなるというふうに整えたところでございます。

高森委員 図書館利用について、下の件名ですが、台東区内に在住・在勤・在学が要件ということですがけれども、例えばこの在学の要件という部分は、区内の日本語学校などに在学している留学生や専門学校の学生は要件に入るのでしょうか。

中央図書館長 在学につきましては、区内に所在する学校が所在地で所在しているかということで、その学生さんであれば学生証の提示等で登録させていただいていますが、他区に所在している分については対象外となっております。

樋口委員 学校の定義は、今の日本語学校とか専門学校とかありますよね。それは大丈夫なんですか。

中央図書館長 特に、今ちょっと全て確認しておりませんが、原則としては学校、例えばその日本語学校等も認めていると把握しております。

矢下教育長 よろしいでしょうか。

それでは、庶務課のAについては報告どおり了承願います。

## 2 その他

矢下教育長

次に、その他事項についてでございます。お手元に資料を配付させていただいております。後ほどご覧いただければと思いますが、ご質問や補足の説明などはございますか。

よろしいですか。

(なし)

矢下教育長 その他何かございますでしょうか。

(なし)

矢下教育長 それでは、以上をもって本日予定された議事日程は全て終了いたしました。  
これもちまして、本日の定例会を閉じ散会をいたします。  
ありがとうございました。

午後4時57分 閉会